

## 巨大古墳と技術革新の世紀



### I はじめに

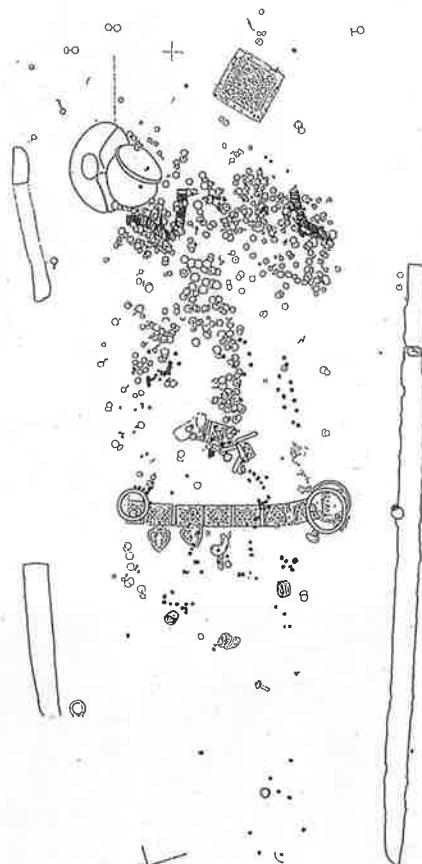
- 森浩一、1981『巨大古墳の世紀』岩波新書  
藤間生大、1968『倭の五王』岩波新書

### II 巨大古墳の世紀

- (1) 巨大古墳の出現 百舌鳥・古市古墳群  
(2) 巨大古墳群の分布  
(3) 巨大古墳群成立の背景

### III 手工業製品に見られる技術革新

- (1) 須恵器  
(2) 農具 U 字型鋤先  
(3) 甲冑 革綴から鉢留へ  
(4) 馬具  
(5) 金・金銅・銀・鍍銀製装身具  
(6) 象嵌技法



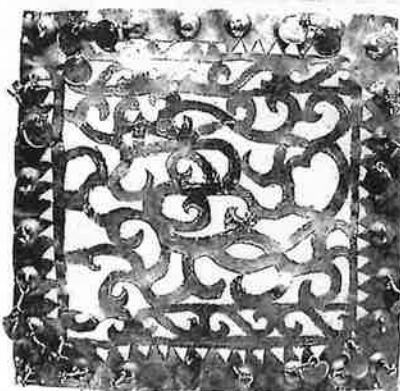
### IV 遺構における変容

- (1) 作り付け竈と置竈  
(2) 横穴式石室

### V おわりに

- (1) 高句麗文化の影響は?  
(2) 北東アジアにおける南北世界の形成  
(3) 外交の二重構造 國際と民(地)際

新沢  
126  
号墳



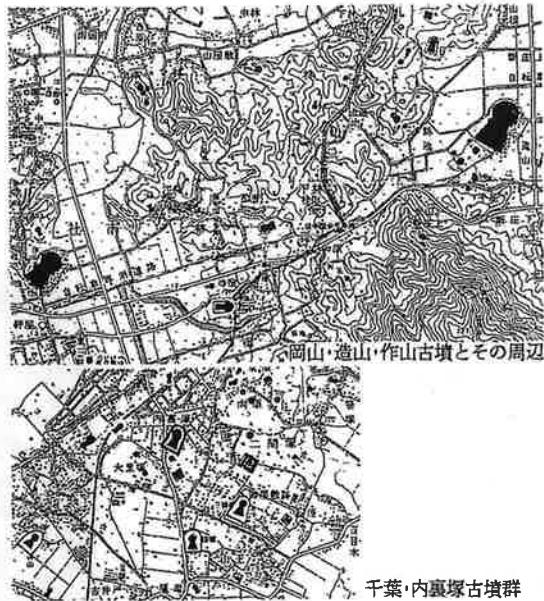
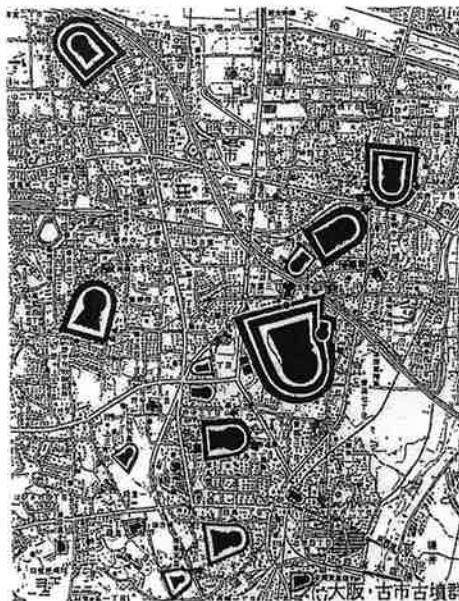
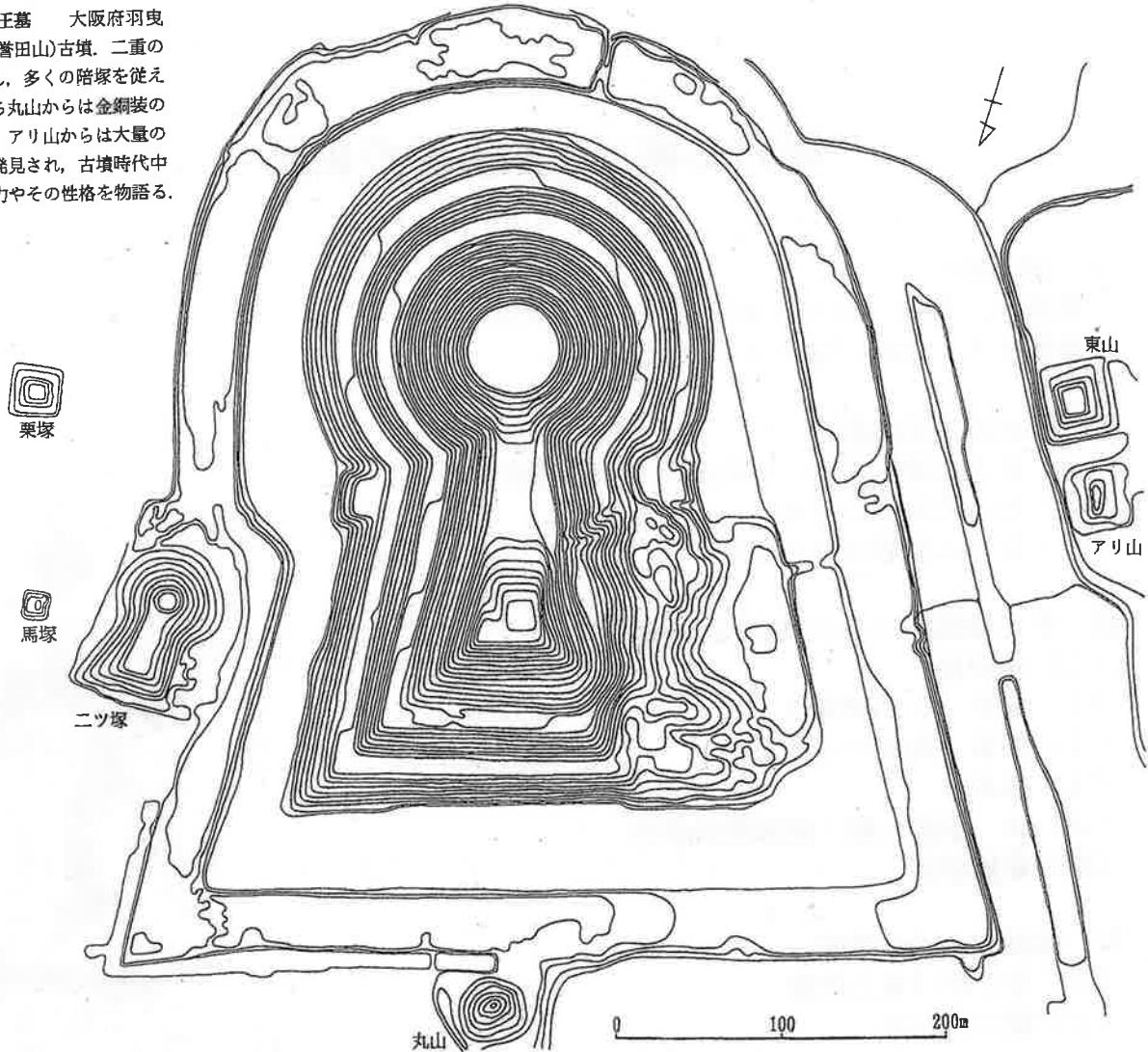
新沢 126 号墳

被葬者周辺の副葬品出土のようす

### 【お知らせ】

次回の館長講座は 8 月 12 日(日)13:30~(2 時間程度) 講義室にて開催いたします。

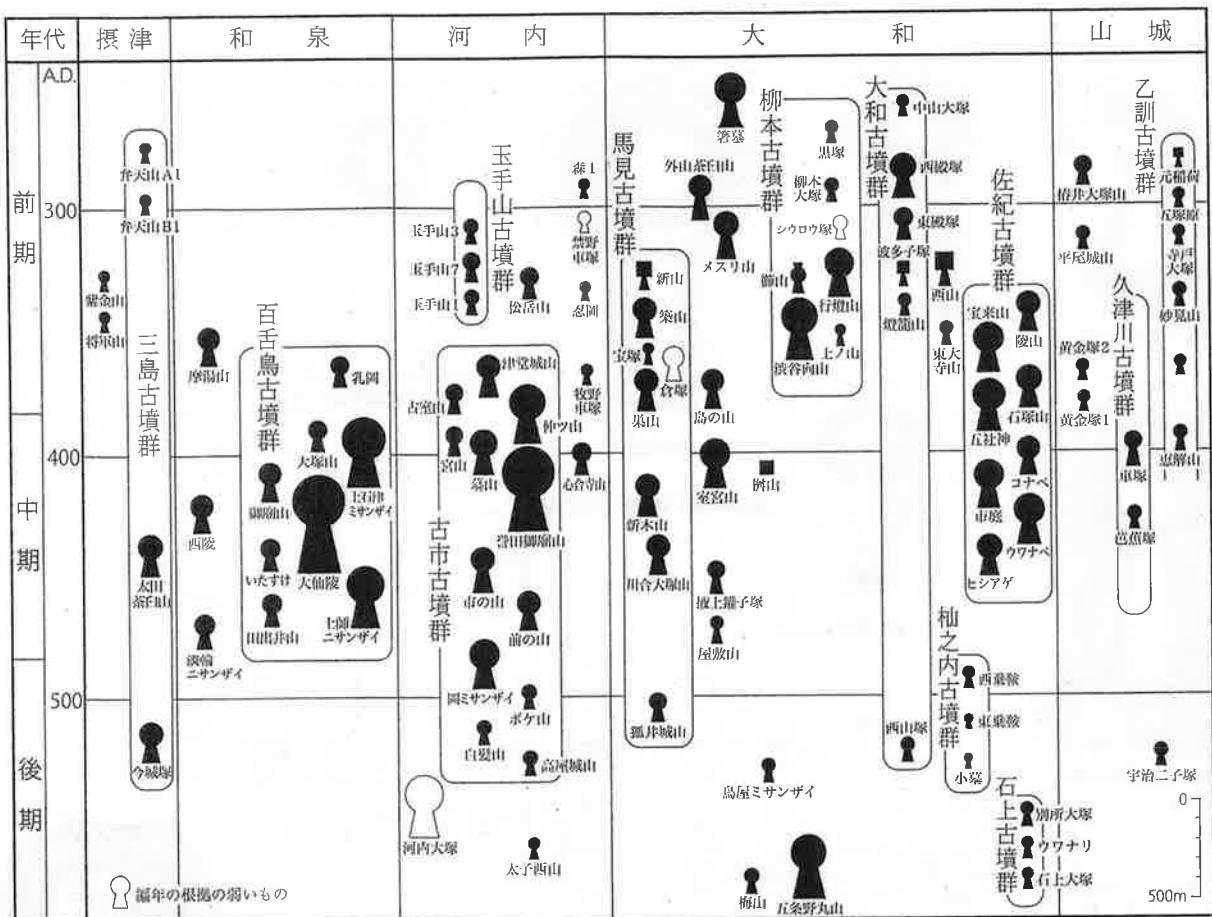
5世紀の大王墓 大阪府羽曳野市伝応神陵(誉田山)古墳。二重の濠や塙を巡らし、多くの陪塙を従える。陪塙のうち丸山からは金銅装の美麗な馬具が、アリ山からは大量の鐵器の集積が発見され、古墳時代中期の大王の権力やその性格を物語る。



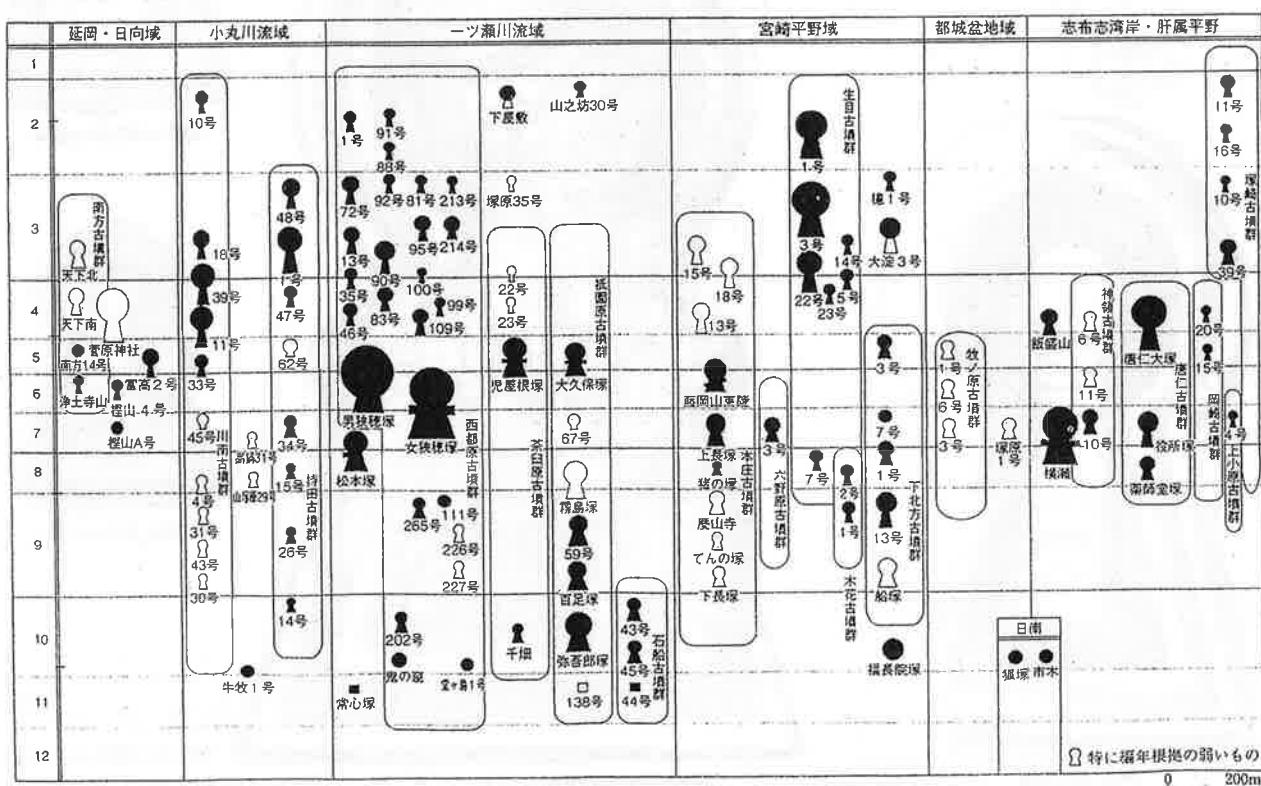
各地の大古墳群 各地域の代表的な大古墳群を同一縮尺(1:32050)で比較した。面積や密集度、

個々の古墳の規模など、さまざまなもので、畿内の古市古墳群が大きく抜きんでて存在であることが知られるよう、中央と地方における、墳形の同一性と規模の隔絶などをどのように理解するかは、この時代の歴史的評価にかかわる重要な視点の一つである。





白石太一郎、2017「古墳からみた物部氏」『大阪府立近つ飛鳥博物館 食官報』20

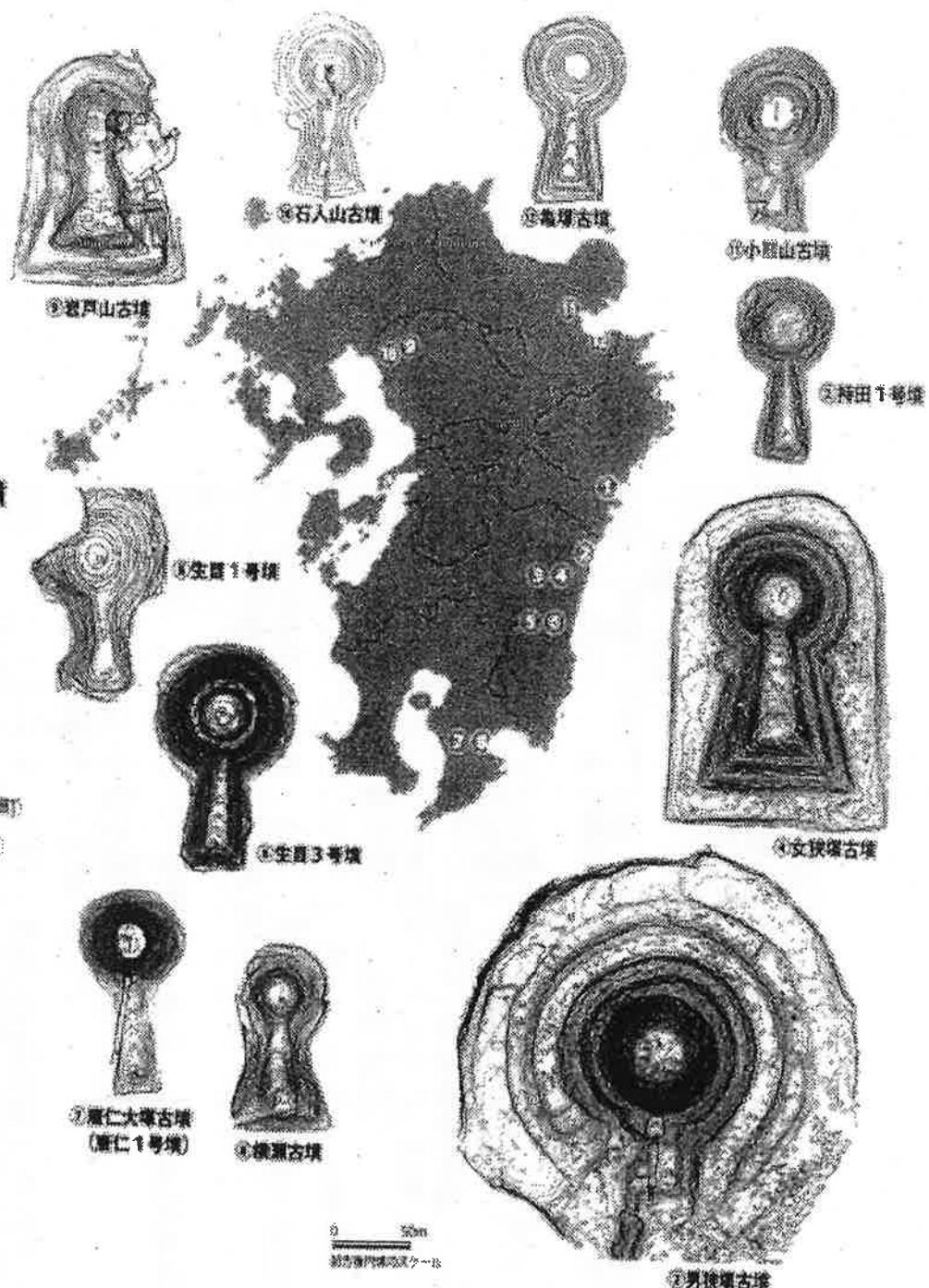


九州南部の前方後円墳編年 (橋本達也2011「九州南部」『講座日本の考古学7 古墳時代(上)』青木書店)

西谷正、2016「日向の古墳文化」シンポジウム 世界文化遺産としての古墳を考える

### 九州の墳長120m以上の前方後円墳

- 日向 8基** (大宰半島地域を含む)
- ① 菩原神社古墳 (120m: 宮崎県延岡市)
  - ② 持田1号墳 (120m: 宮崎県都城市)
  - ③ 男狹穗塚古墳 (176m: 宮崎県西都市)
  - ④ 女狹穗塚古墳 (176m: 宮崎県西都市)
  - ⑤ 生目1号墳 (130m: 宮崎県宮崎市)
  - ⑥ 生目3号墳 (140m: 宮崎県宮崎市)
  - ⑦ 腹仁大塚古墳 (140m: 鹿児島県垂水市)
  - ⑧ 横瀬古墳 (134m: 鹿児島県大崎町)
- 筑後 2基**
- ⑨ 岩戸山古墳 (138m: 熊本県八女市)
  - ⑩ 石人山古墳 (120m: 熊本県山鹿市)
- 豊後 2基**
- ⑪ 小熊山古墳 (120m: 大分県杵築市)
  - ⑫ 龜塚古墳 (120m: 大分県大分市)
- ※最終は墳長です、墳高については絶対者解で  
解説の相違があります。  
※菅原神社古墳は未測量で、無駄解は勘定して  
いません。



## 九州島の巨大古墳上位12基

東 憲章, 2014「生目・西御原・新田原からみた日向の古墳と『記紀』」  
シンボル・ジャム 世界文化遺産としての古墳を考る  
西御原古墳群世界文化遺産登録推進シンボル・ジャム実行委員会

倭五王遣使年表

		中国王朝	年	次	内	容	(出)	典)
(13)	(12)	(11)	晋安帝	義熙九年(四一三)	倭国方物を献ず(「晋書」本紀)			
梁武帝	齊高帝	宋順帝	宋文帝	元嘉二〇年(四四三)	晋安帝の時、倭王讚あり、使を遣わして朝貢す(「南史」列伝)			
			宋文帝	元嘉一五年(四三八)	倭讚万里貢を修む、除授を賜うべし(「宋書」列伝)			
			宋文帝	元嘉二八年(四五一)	讚また司馬曹達を遣わし表を奉り方物を献ず(「宋書」列伝)			
			宋文帝	元嘉二〇年(四四三)	倭国王使を遣わして方物を献ず(「宋書」本紀)			
			宋孝武帝	大明四年(四六〇)	倭国王珍を以つて安東將軍となす(「宋書」本紀)			
			宋孝武帝	大明六年(四六二)	讚死し、弟珍立つ、使を遣わして貢献、安東將軍倭国王に除す。珍また倭隋ら十三人を平西・征虜・冠軍・捕國將軍の号に除正せんことを求む。			
			宋順帝	昇明元年(四七七)	詔してならびに聽す(「宋書」列伝)			
			宋順帝	昇明二年(四七八)	倭國使を遣わして方物を献ず(「宋書」本紀)			
			武、進、天監元年(五〇一)	宋順帝	倭國王世子興を以つて安東將軍となす(「宋書」本紀)			
			武、進、天監元年(五〇一)	武立つ。使を遣わして上表し(倭王武の上表文)、武を使持節都督を新除し、号を鎮東大將軍となす(「南史」列伝)	安東將軍倭王			
			武、進、天監元年(五〇一)	倭・新羅・任那・加羅・秦韓・幕韓六國諸軍事安東大將軍倭王	倭國使を遣わして方物を献ず(「宋書」本紀)			
			武、進、天監元年(五〇一)	倭國王武使を遣わして方物を献ず。武を以つて安東大將軍となす(「宋書」本紀)	倭國王武使を遣わして方物を献ず。武を以つて安東大將軍となす(「宋書」本紀)			
			武、進、天監元年(五〇一)	倭・新羅・任那・加羅・秦韓・幕韓六國將軍安東大將軍倭王	倭國使を遣わして方物を献ず(「宋書」本紀)			
			武、進、天監元年(五〇一)	倭・新羅・任那・加羅・秦韓・幕韓六國將軍安東大將軍倭王	倭國使を遣わして方物を献ず(「宋書」本紀)			

わのごおう 倭の五王 五世紀に中国南朝の劉宋に使  
を遣わした讀・珍・濟・興・武の五人の倭王。『晉書』安  
帝紀などには、倭國あるいは倭王贊(讀)が四一三年(義熙  
九)に高句麗などと東晉に遣使した記事を載せるが、當時  
の倭と高句麗は敵対関係にあってそろって朝貢できる環  
境ではなく、倭が獻じたとされる貂皮や人参も高句麗の  
特產物であることから、高句麗が戰闘で捕虜にした倭人  
を使節に仕立てたものとみなすべきであろう。よって倭  
の五王による最初の對中外交は、『宋書』夷蠻列伝倭國條  
(いわゆる倭國伝)にみえる四二一年(永初二)の倭讀によ  
る遣使ということになる。讀の朝貢に対しても、武帝(高祖)  
は遠誠を喜んで除授したとあるが、爵号の具体的な内容は  
不明である。ただ珍以下の例を勘案すると、「安東將軍・  
倭國王」であった可能性が高い。讀はその後、四二五年  
(元嘉二)に司馬曹達を遣わして文帝(太祖)に上表し、四  
三〇年にも方物を献じている。讀が死ぬと弟の珍が立ち、  
倭隋ら十三人に対しても平西・征虜・冠軍・輔國の各將  
軍号の除正を求めているが、隋の「平西將軍」は珍自身  
の一級下にすぎず、ほかの將軍号も「安東將軍」と同じ  
第三品であることから、當時の倭國は王とその他のにそれ  
ほどの格差がない、比較的フラットな構造だったのでは  
ないかと考えられている。倭王は臣従者を將軍府の屬僚  
である府官(長史・司馬・參軍)に任命し、彼らに應分の  
爵号を仮授・推薦することによって、政治的・身分的秩  
序の創出をはかるとしていたのである。次の濟は文帝  
の四四三年と四五一年、および孝武帝(世祖)の四六〇年  
(大明四)に遣使し、四五一年には「使持節・都督倭新羅  
任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事」が加えられ、『宋書』文帝  
本紀によれば「安東大將軍」に進号したとある。また濟



建武五年画文帶同向式神獸鏡 径24.2cm

吉川弘文館

はこの時、二十三人に「重郡」(將軍と郡太守)号の除正を  
も求めている。なお讀・珍と濟の統柄に関して、倭國伝  
にある「倭讀」「倭隋」に対しても帝本紀には「倭王倭濟」  
とあることから、両者は「倭」を姓とする同一集団の出  
身であったとする見解もあるが、倭王の倭姓は高句麗王  
の高姓や百濟王の余(扶余)姓と同じく、當時の中國が國  
号の一部や種族名を周辺君長の姓として認識していたこ  
とを示すものにすぎず、政治權力(倭王)としての連續性  
は認めつつも、両者は異なる血縁集團に所属していたと  
みるべきであろう。濟の死後には世子興が立ち、四六二  
年に貢献して「安東將軍・倭國王」に叙せられ、続いて  
弟の武が立つて「使持節・都督倭百濟新羅任那加羅秦韓  
慕韓七國諸軍事・安東大將軍・倭國王」と自称した。武  
は順帝の四七八年(昇明二)に上表し、倭は宋の冊封を受  
けて代々朝貢してきたが、高句麗が妨害するので征討を  
計画したもの、父兄の相つぐ死によって成就していない

いことを述べ、みずから「開府儀同三司」を、その余に  
もそれぞれ称号を仮授して、皇帝の助力を求めた。結局  
武には濟と同じ「使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓  
六國諸軍事・安東大將軍・倭王」が叙爵され、その後も  
南齊から四七九年(建元元)に「鎮東大將軍」が、梁から  
五〇二年(天監元)に「征東大將軍」が贈られるが、それ  
らは建国に伴う任官で、武の遣使に対するものではなか  
った。倭の五王の對中外交は、半島情勢を有利に運ぶた  
め高句麗王・百濟王の爵位を常に意識したものであつた  
が、その差は最後の武に至つても埋まることはなかつた。  
なお倭の五王の比定については、記紀にみえる當時の天  
皇の實在性が証明できない以上、倭王武を雄略とする以  
外は慎重になるべきであろう。

(佐藤 長門)



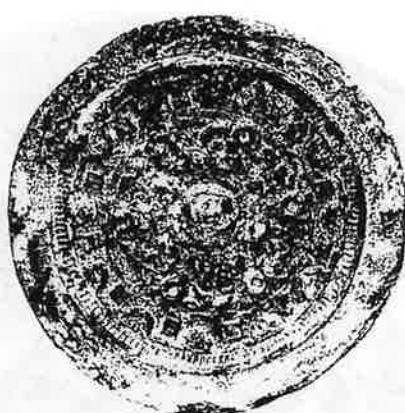
画文帶四神四獸鏡(神島 八代神社)



画文帶四神四獸鏡(神前山 1号墳)



画文帶四神四獸鏡(亀山 2号墳)



環状乳画文帶神獸鏡(伝鈴鹿市)



画文帶四佛四獸鏡(大須二子山古墳)

## 画文帶四佛四獸鏡

画文帶神獸鏡の神像のかわりに仏像を表わした鏡で、中国の六朝時代初期に中国で製作された。中国での出土はなく、我国でも二種類の同范鏡が数例知られているのみである。

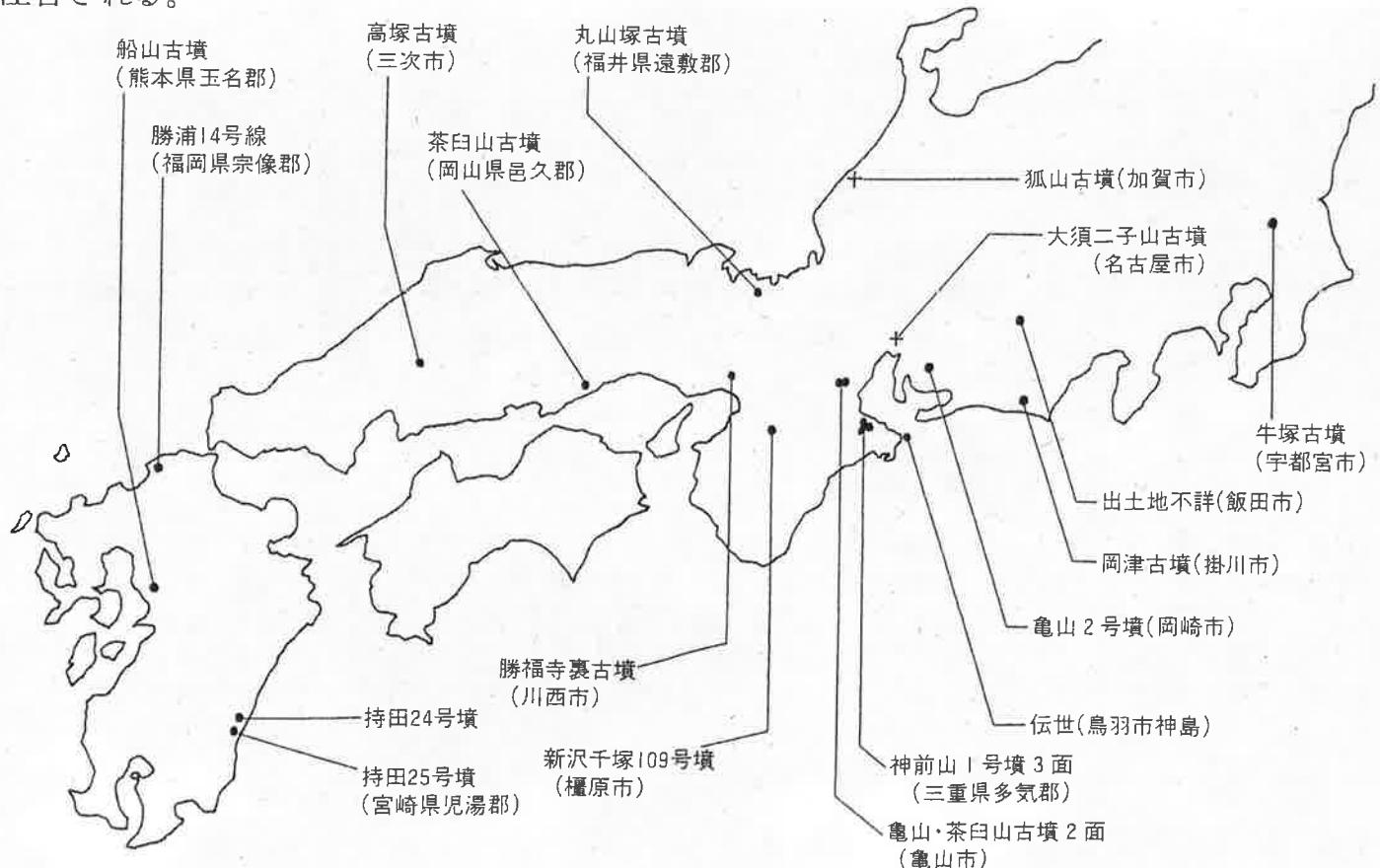
大須二子山古墳出土例（左写真 現在所在不明）は、倉敷市王墓山古墳、木更津市鶴巻古墳出土鏡と同范関係を持つ。

## 鏡 一画文帶神獸鏡一

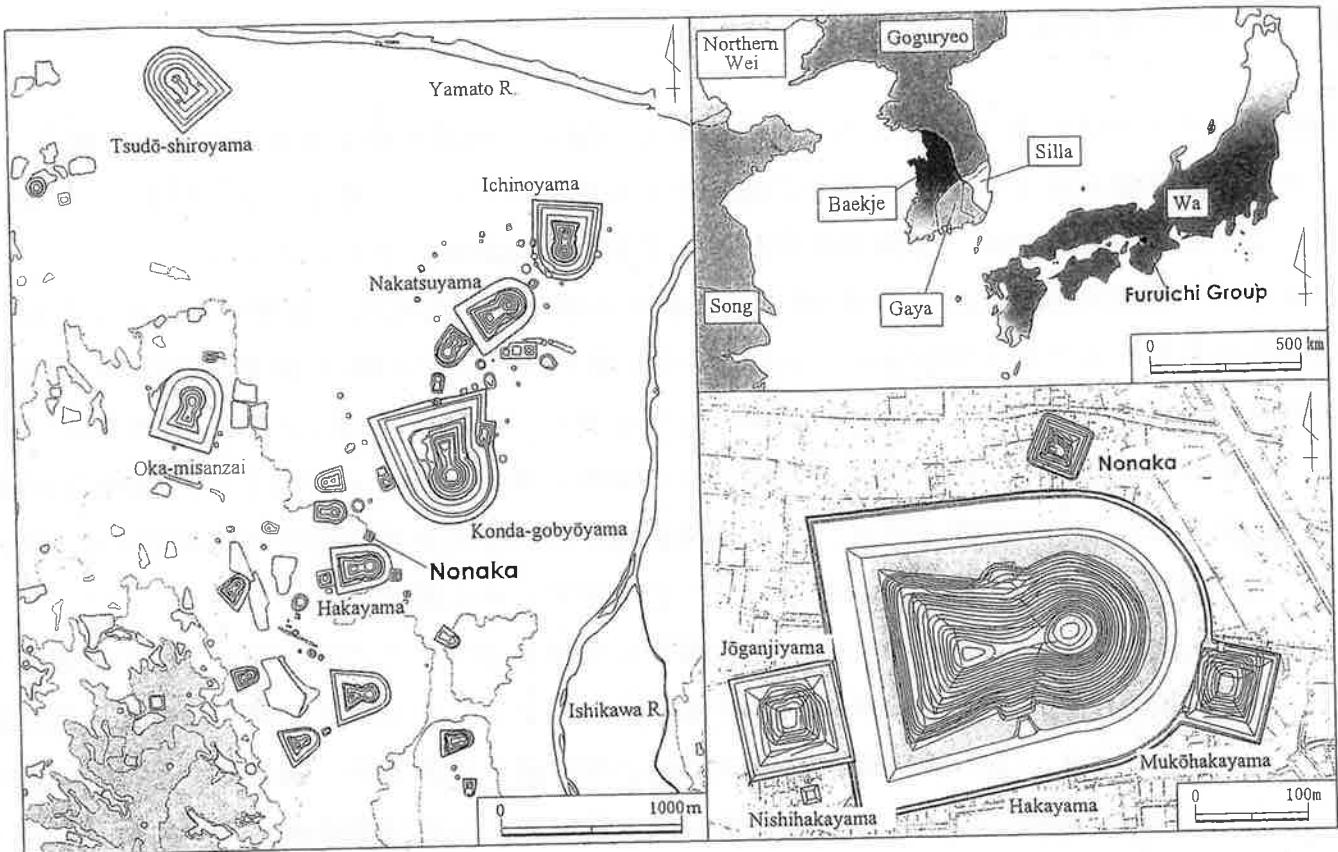
神獸鏡のうち外区に鳥・獸・雲などの文様帯をもつ鏡で、大阪府黃金塚古墳出土例に魏の「景初三年」の紀年銘があるので、中国の三国時代から作られていたと考えられている。この鏡式には、①半円方形帶神獸鏡・②環状乳神獸鏡・③重列式神獸鏡の3型式がある。

日本では、京都府椿井大塚山古墳・岐阜県円満寺古墳など4世紀代の古墳からも出土するが、5世紀代の古墳からの出土例が多い。5世紀代の古墳から出土する鏡は、南齊の建武5年(498年)の紀年銘を持つ例が示すように中国の南朝のものが多い。中国の「宋書」などに、いわゆる「倭の五王」が朝鮮半島南部における権益を守るために南朝に使者を送り、「倭国王」や「安東大將軍」などの称号を得たという記事がある。画文帶神獸鏡がこのことを具体的に示すかどうかは別として、この鏡は、当時日中間に交流があったことを示すものと言えよう。

この鏡は、東海地方では伊勢湾沿岸に特に濃密な分布を示す。この地方では、①名古屋市の大須二子山古墳出土例と、②岡崎市亀山2号墳の出土例をはじめとする二種類の鏡が、同范鏡を持つことが知られている。その分有関係は下図に示す通りであるが、亀山2号墳出土の鏡のグループは、22面の多数にのぼり、その分布も南は宮崎県から北は栃木県まで広範囲にわたっている。伊勢湾沿岸には、このうち7面が分布する。他地域の古墳では、1面ずつしか出土していないのに対して、三重県神前山1号墳で3面、亀山・茶臼山古墳で2面とまとまって出土している。また、東海地方でも三角縁神獸鏡の出土の少ない三重県からの出土例が多いことも注目される。



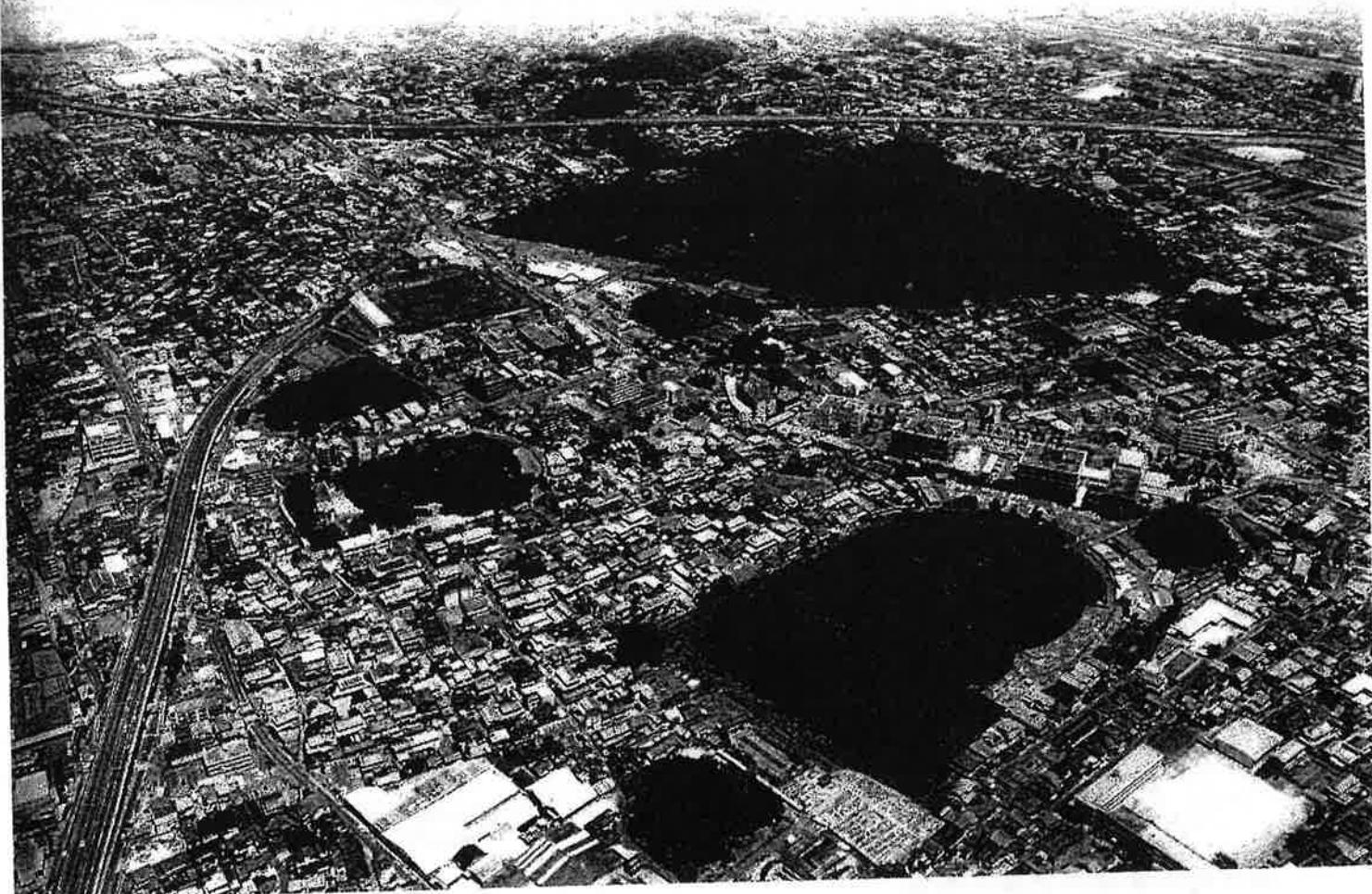
画文帶神獸鏡同范鏡分有図



Furuichi Kofun Group and Nonaka Kofun

Furuichi Kofun Group

(Large *kofun* in foreground: Hakayama Kofun; giant *kofun* in background: Konda-gobyōyama Kofun)



Teruhiko Takahashi Edited, 2016 "Nonaka Kofun and the Age of the Five Kings of Wa", Osaka University Press

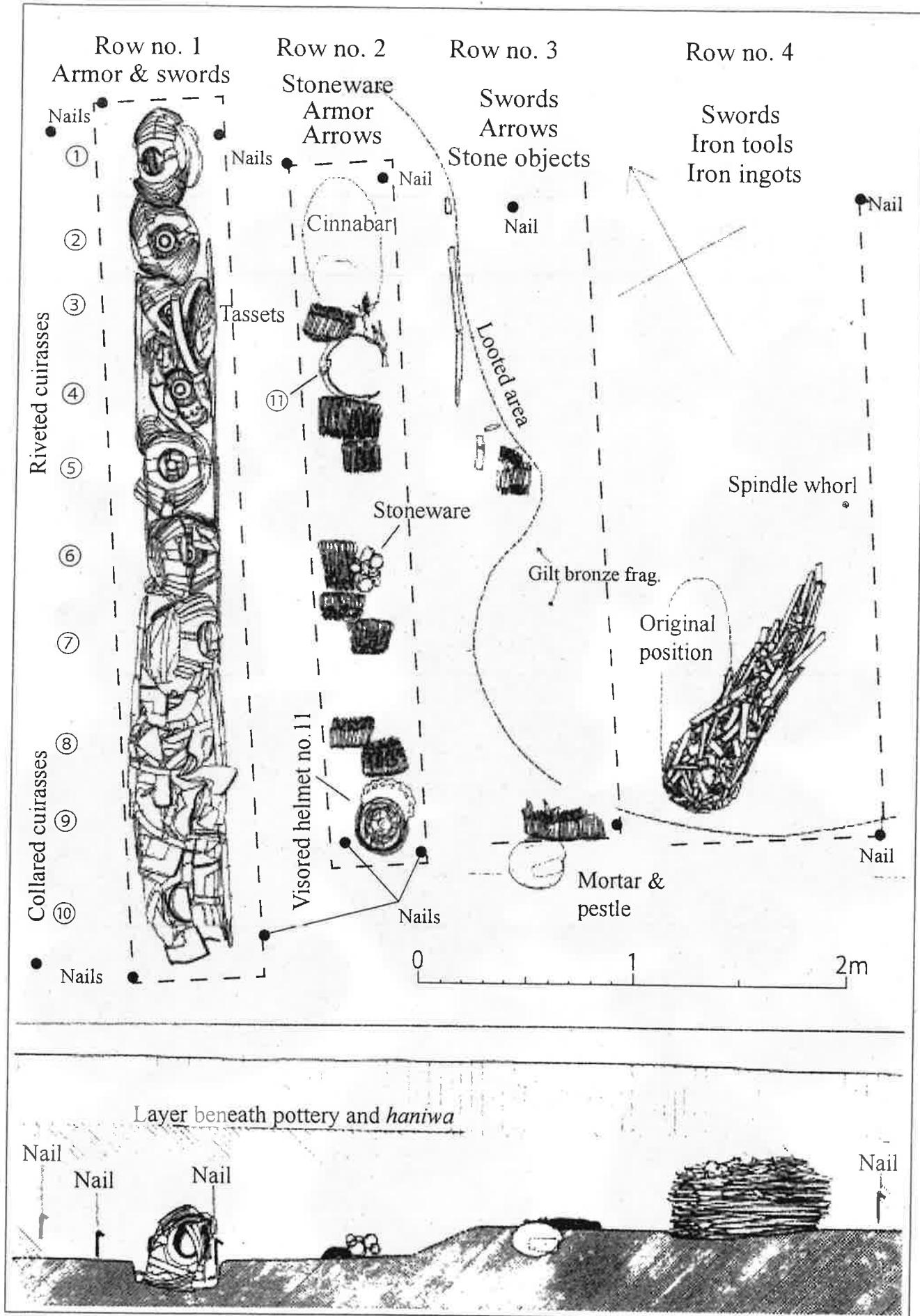


Fig. Location of burial goods within the burial facility (after drawing by Kitano Kōhei)



Armor from Nonaka Kofun

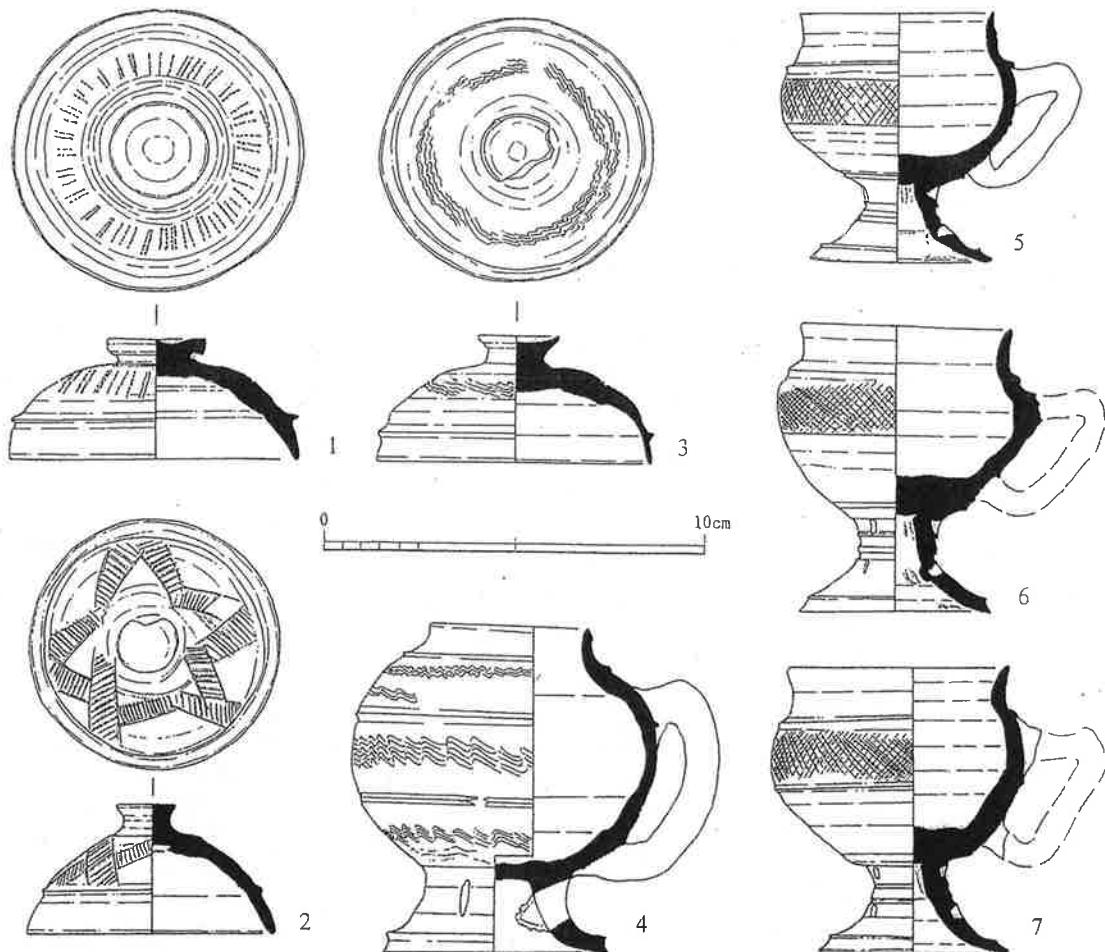


Fig. 1 Small jars with handles and lids excavated from Nonaka Kofun

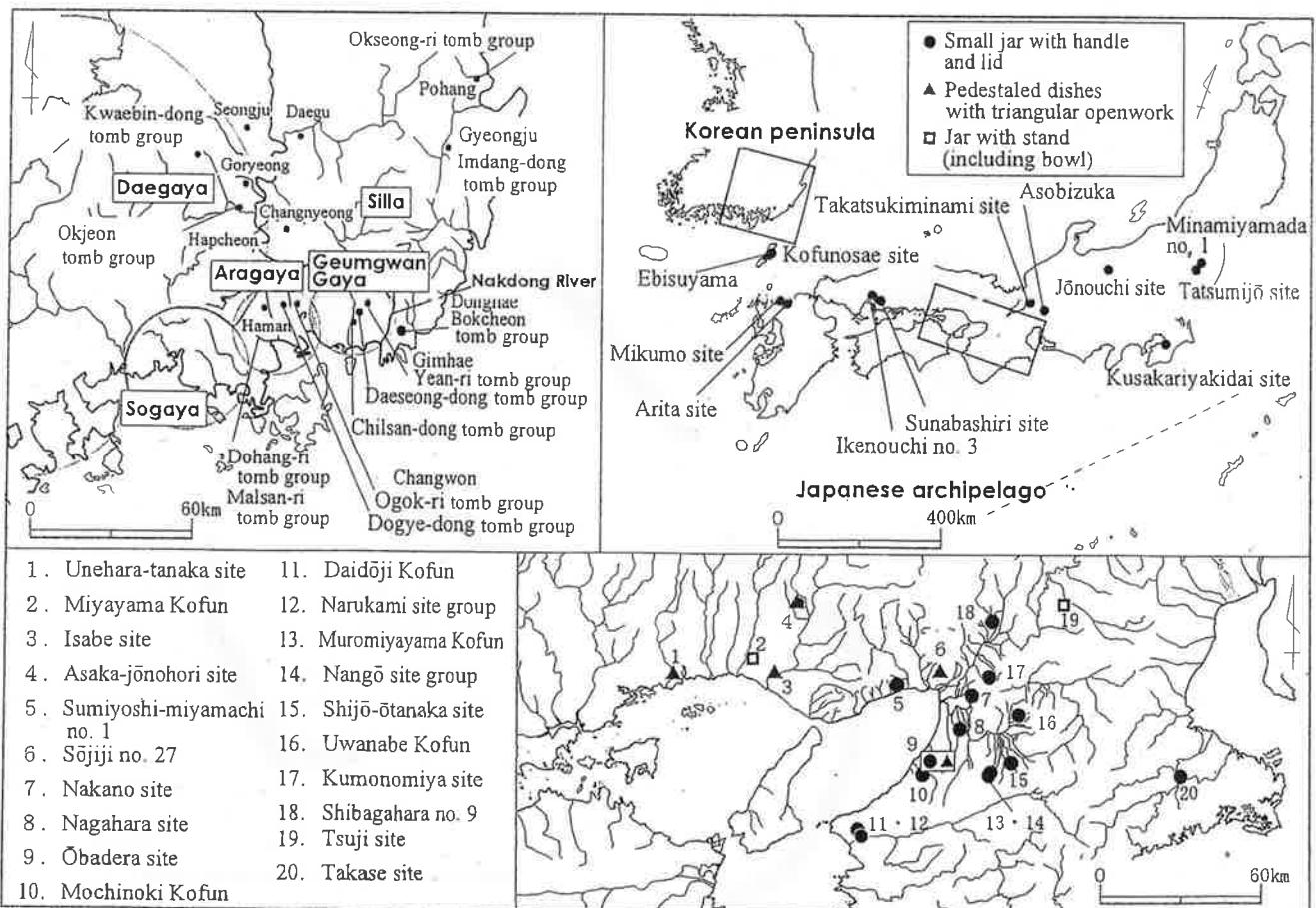
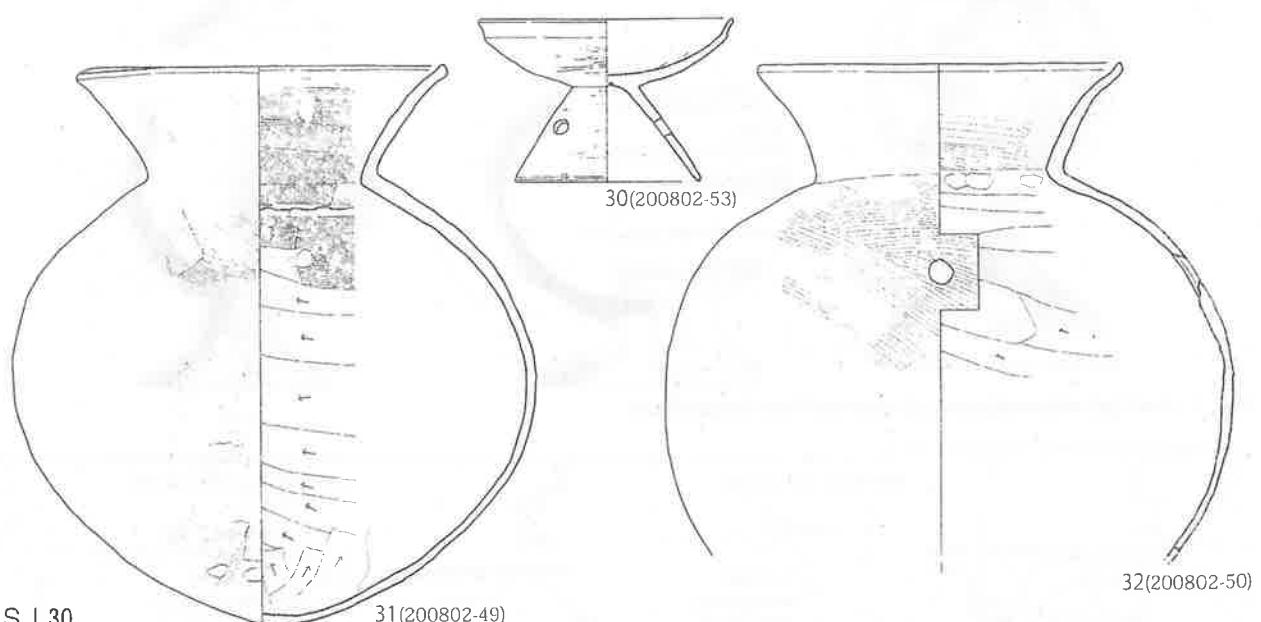
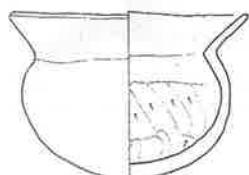


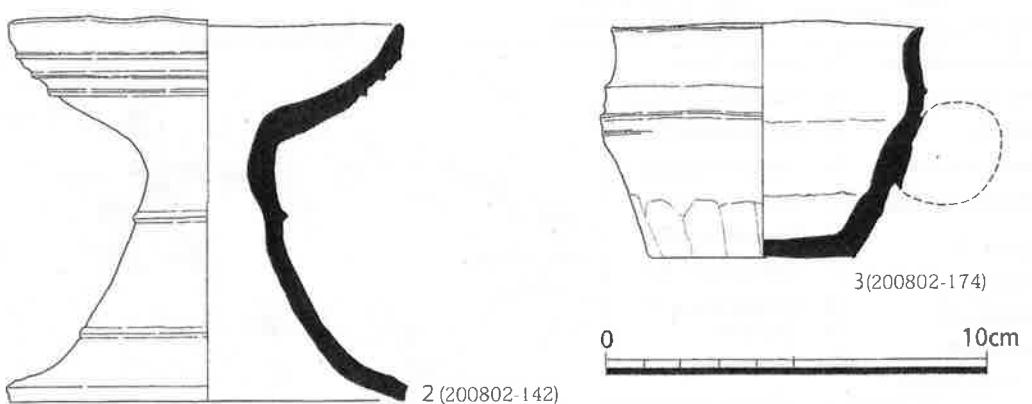
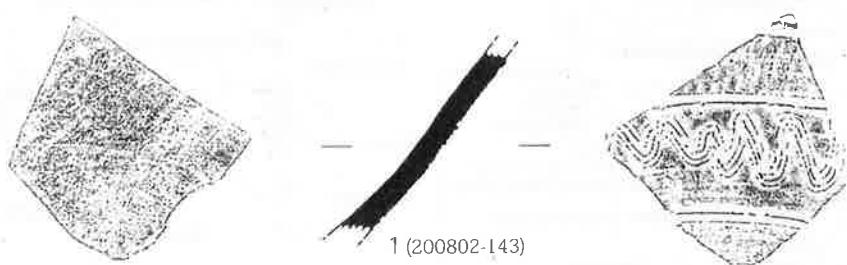
Fig. 2 Distribution of small jars with handles and lids, pedestaled dishes with triangular openwork, and jars with stands



0 10cm

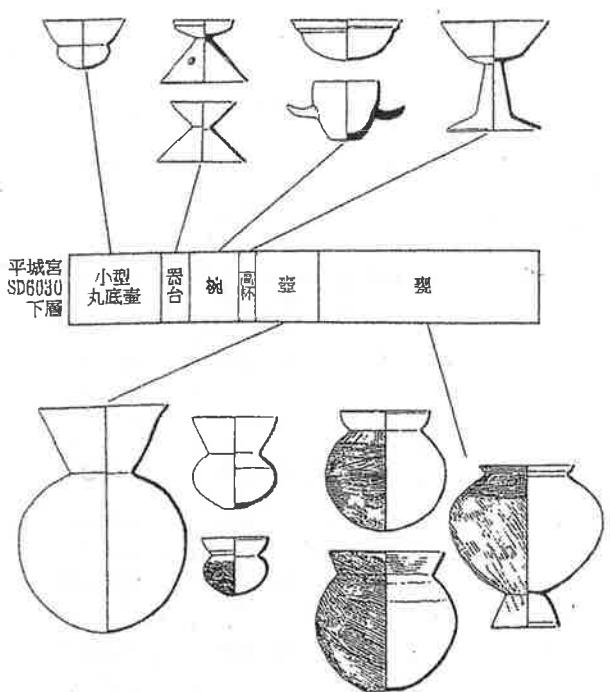


S | 30

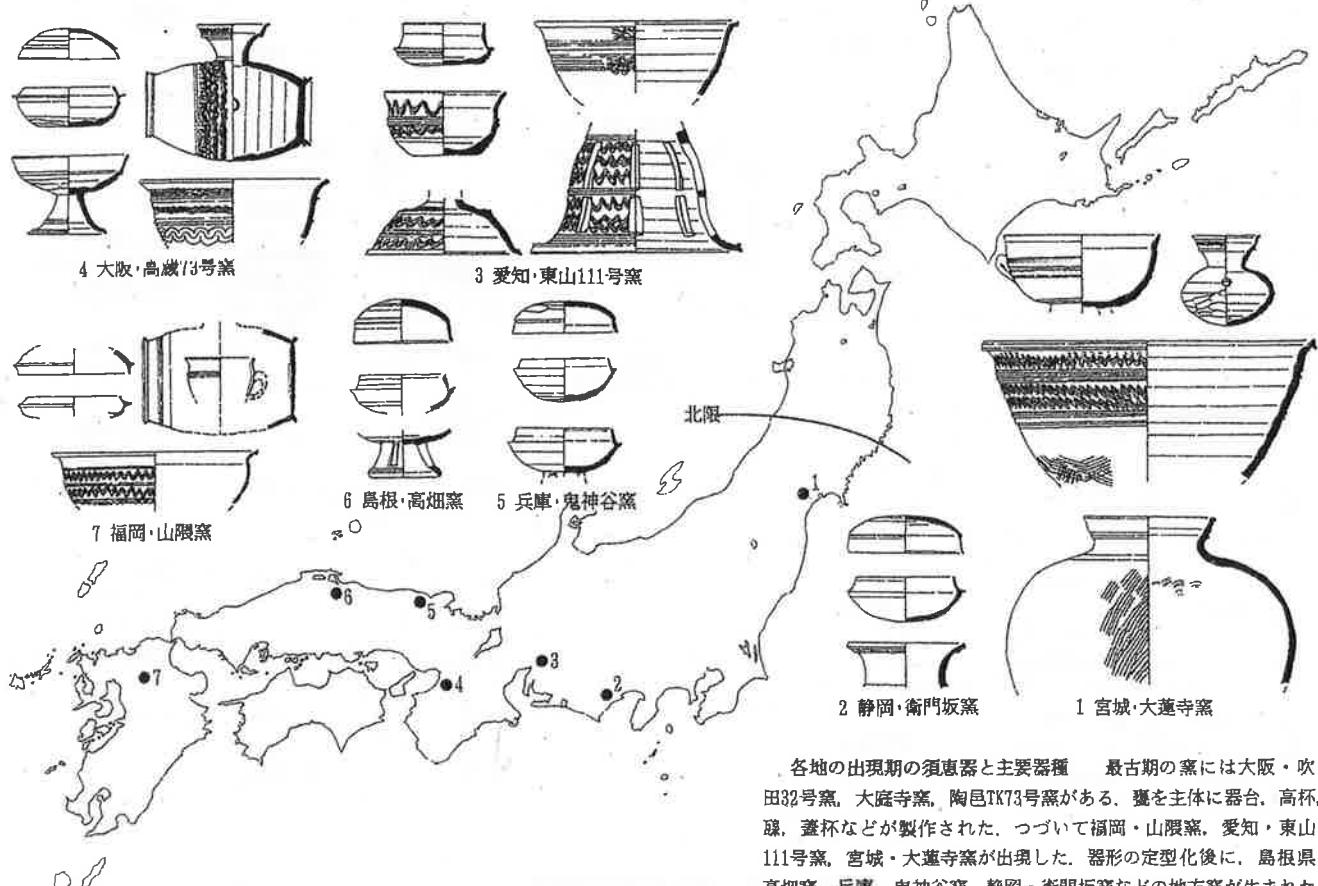
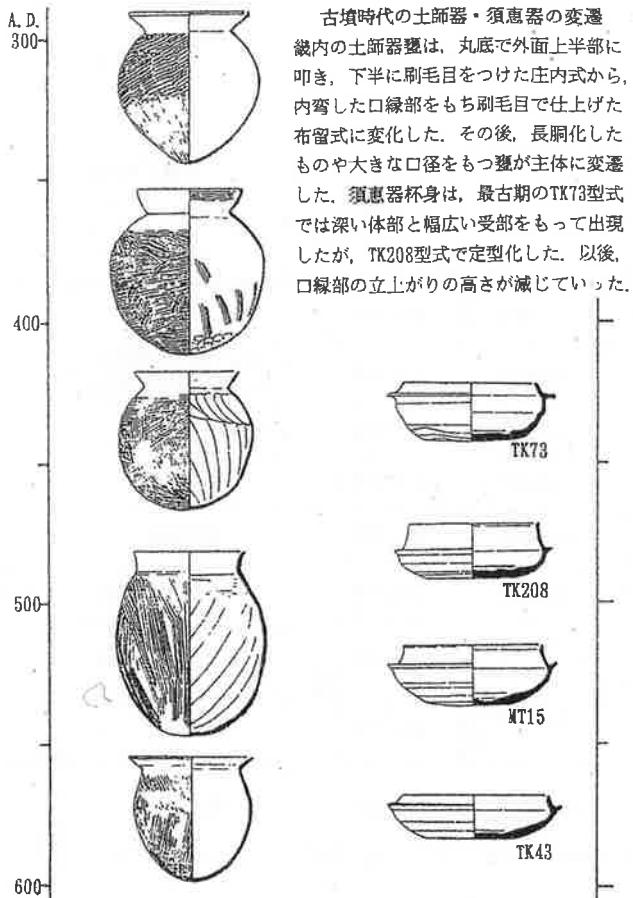


0 10cm

久留米市教育委員会、2010「太郎原遺跡 第1次調査」久留米市文化財方調查報告書、第290集



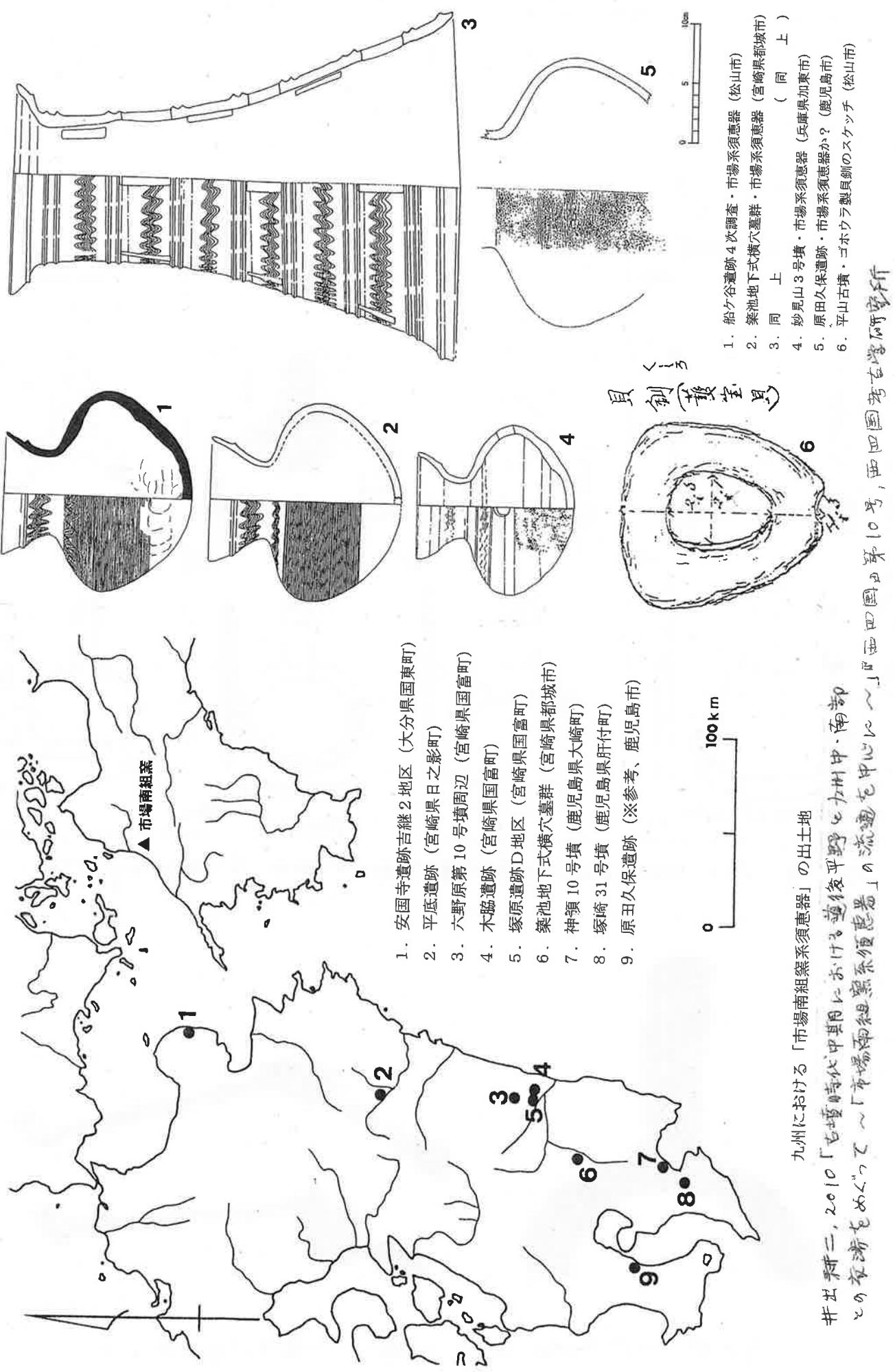
古墳時代前期の土師器と器種組成(布留I式) 布留I式は須恵器出現以前の土師器である。小型丸底壺、器台、椀は丁寧にヘラミガキする。これに高杯を加えた供饌用が40%を占める。壺は貯蔵用の器種であるが、スヌが付着したものもあり、火にかけることもあったことがわかる。甕は47%を占める。口縁部が内弯する畿内型のほかに、東海系のS字状口縁をもつ合付甕が甕の13%に及ぶ。ほかに山陰系の複合口縁をもつものもある。SD6030下層の土器は奈良県橿原遺跡の辻土坑4上層の土器と共通し、布留I式の標準的な資料である。



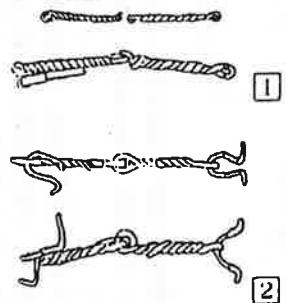
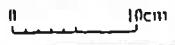
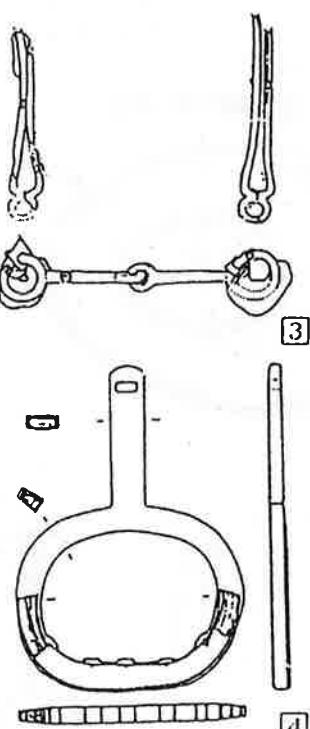
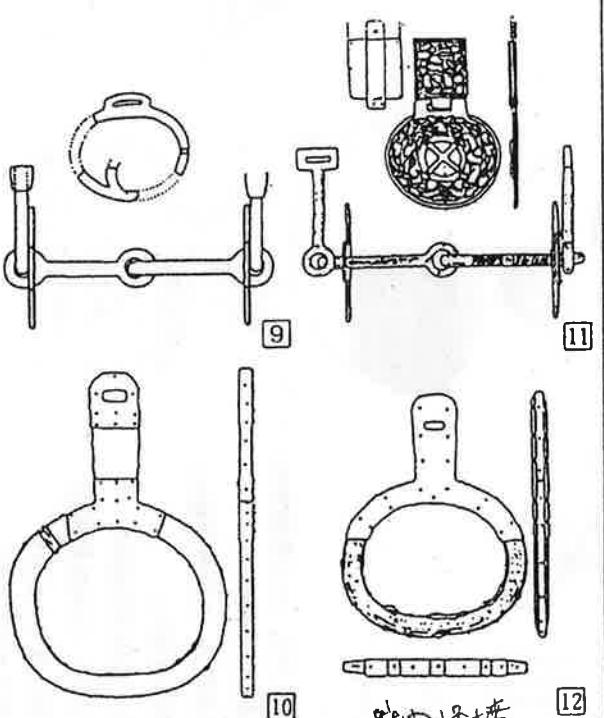
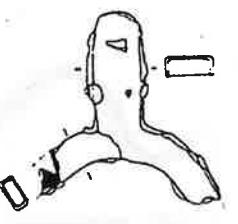
各地の出現期の須恵器と主要器種 最古期の窯には大阪・吹田32号窯、大庭寺窯、陶邑TK73号窯がある。甕を主体に器台、高杯、碗、蓋杯などが製作された。つづいて福岡・山隈窯、愛知・東山111号窯、宮城・大蓮寺窯が出現した。器形の定型化後に、島根県高畠窯、兵庫・鬼神谷窯、静岡・衛門坂窯などの地方窯が生まれた。

田辺昭三氏 旧案 1968	中村 浩氏 案 1978 - 2001	田辺昭三氏 新案 1981	今回の展示案	曆年代 (参考)	
		前 期			
TK73型式	I 型 式	第 1 段階 後 期	一須賀 2 号窯段階 TK73型式 TK73号窯段階	播 篠 期	5世紀前半
TK216型式		第 2 段階	TK216型式	第 1 段階	412年
TK208型式		第 3 段階	TK208型式 CN46号窯段階 TK208号窯段階	第 2 段階	5世紀中頃
TK23型式		第 4 段階	TK23型式	第 3 段階	471年
TK47型式		第 5 段階	TK47型式	第 4 段階	5世紀後半
MT15型式		第 1 段階	MT15型式	第 5 段階	6世紀前半
TK10型式		第 2 段階	TK10号窯段階	第 6 段階	6世紀中頃
( )	II 型 式	第 3 段階	TK10型式 MT85号窯段階	第 7 段階	6世紀後半
TK43型式		第 4 段階	TK43型式	第 8 段階	588年
TK209型式		第 5 段階	TK209型式	第 9 段階古	616年以後
( )		第 6 段階		第 9 段階新	
TK217型式	III 型 式	第 1 段階	TK217型式	第 10 段階古	641年
( )		第 2 段階		第 10 段階新	645年
( )		第 3 段階	TK46型式	第 11 段階	648年
MT21型式		第 1 段階	MT21型式	第 12 段階	660年
( )	IV 型 式	第 2 段階		第 13 段階古	
( )		第 3 段階	TK48型式	第 13 段階新	
TK7型式		第 4 段階		第 14 段階	682～685年
TK122型式	V 型 式	第 1 段階		第 15 段階	694～710年
MT5型式		第 2 段階	MT83型式	第 16 段階	701～710年
				第 17 段階	716～725年
				第 18 段階	749年
				第 19 段階	753年 781～784年
				第 20 段階	8世紀末
				第 21 段階	824年

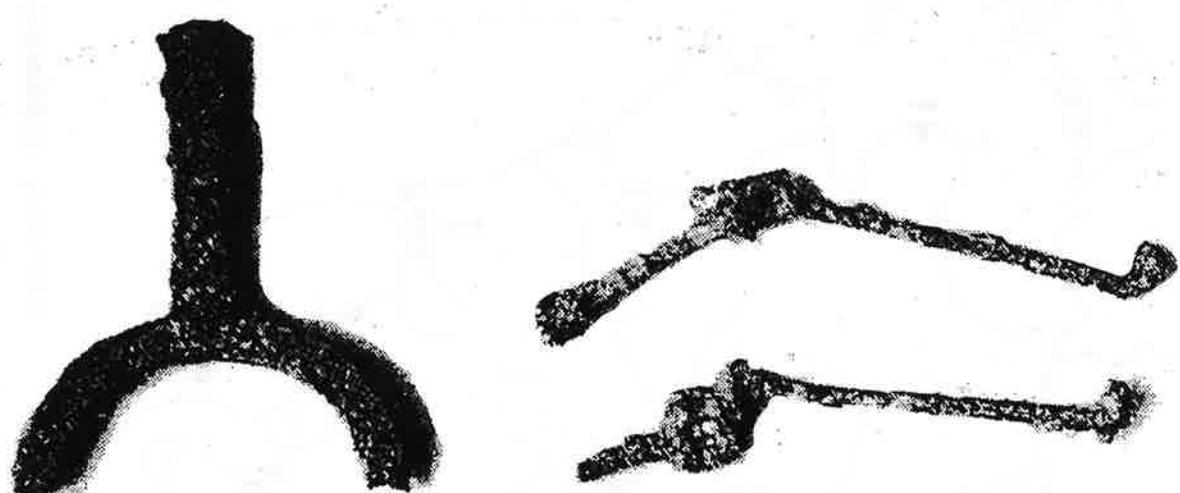
陶邑窯跡群 須恵器編年対照表



日本列島の初期馬具の変遷

北部九州	近畿・西日本	東日本
<p>4世紀後半～5世紀前半</p>  <p>1 2</p>		
<p>5世紀前半～5世紀中葉</p>  <p>3 4 5</p>	 <p>9 10 11 12</p>	 <p>20</p>

千賀 久, 1994 「日本列島における乗馬・風習の開始とその様相」第11回古代シンポジウム



金元龍, 1973 「原城郡 法泉里 石槨墓外 出土遺物」『考古美術』120



部屋北遺跡遠景（手前中央。西から撮影）

古墳時代中期に定着する馬匹生産は、渡来人（馬飼集団）によってもたらされた新來の産業であった。馬の全身骨格が出土し、「河内の馬飼」との関連も想定される大阪府部屋北遺跡周辺から、多数の朝鮮半島系考古資料が出土していることは、そのことを如実に示す。一方で出土馬具の分析からは、牧周辺での馬具製作に倭在来の木工が参与していた形跡が浮かびあがってきた。様々な知識・技術をもつ渡来人と倭人が、集住・雜居し、協業することによって日本列島最初の馬匹生産は軌道に乗っていった。

部屋北遺跡出土馬埋葬土坑（A940）（大阪府指定文化財）

## 初期の馬匹生産遺跡 しつみやきたり 部屋北遺跡

構成 謙早直人

写真提供／大阪府教育委員会



部屋北遺跡出土鏢轡  
(大阪府指定文化財)



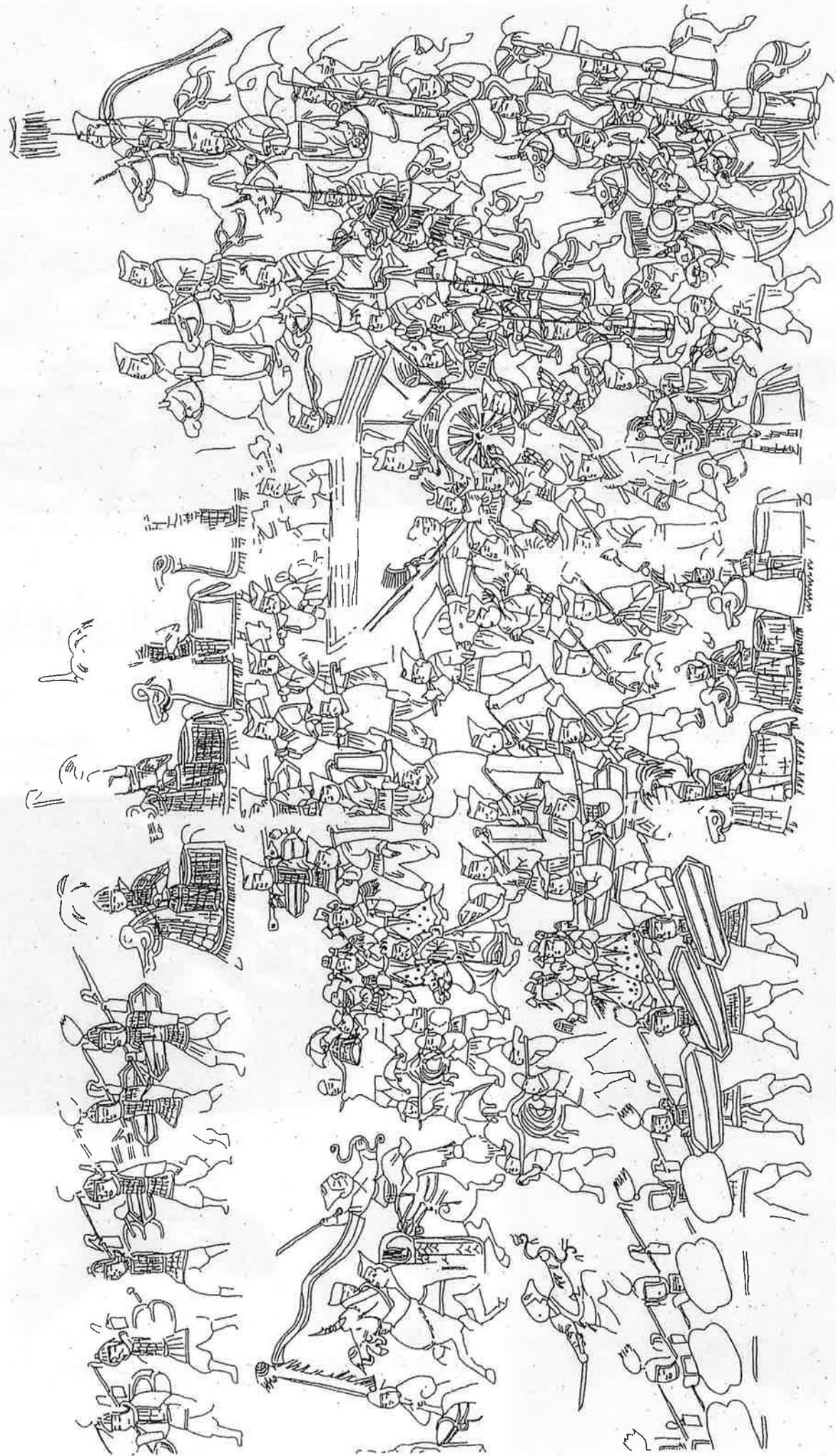
部屋北遺跡出土木製輪鎧  
(大阪府指定文化財)



部屋北遺跡出土木製鞍  
(大阪府指定文化財)

菅谷文則「晋の威儀と武器について」『武器研究』1 2000 中川穂花氏製図より 一部改変

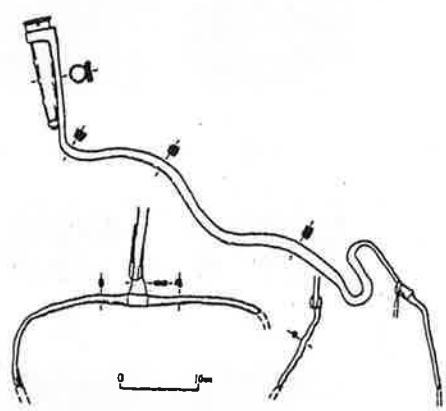
### 安岳第3号墳出行図（部分）



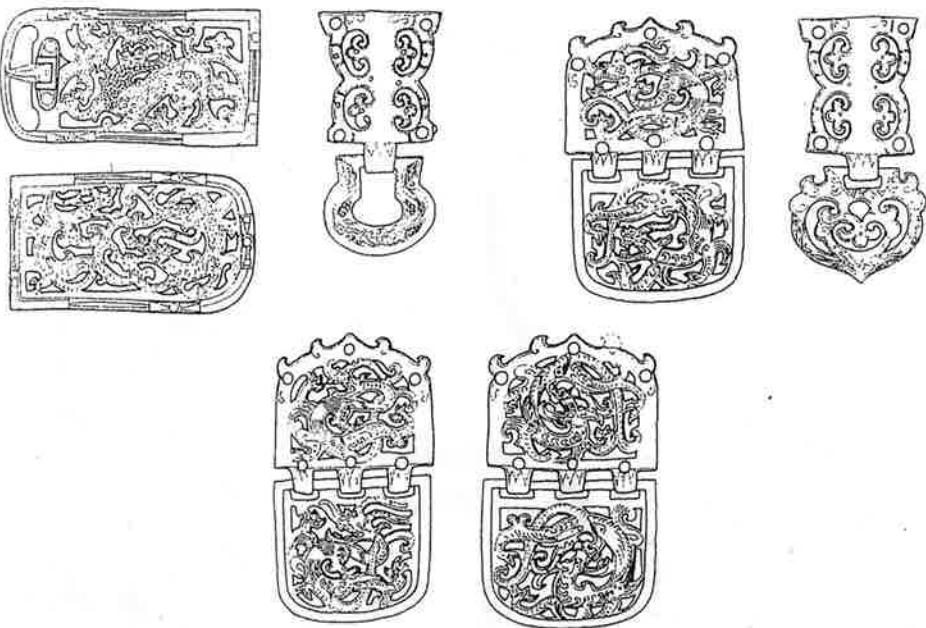


蛇行状鉄器分布図 坂本雄介氏作成

西谷 正, 2017「古代東アジアのなかの象徴」『季刊 形馬台』第132号



安田良道, 1992「東国・伽耶文化」『考古学マガジン』350



喇嘛洞II M 275 墓出土帶金具 (小池 2006) S = 1/2

帯扣と飾牌	馬蹄形垂飾付の鎔板	ハート形垂飾付の鎔板	隅丸方形の鎔板	鉈尾
	1			
2	3			
4	6	7	8	9
5				
10	12			
11				
13	15	16	17	18
14				
19				
20				

晋式带具(孫 2001 を一部改)

1. 定県 43 号漢墓出土 2・3. 洛陽 24 号西晋墓出土 4~9. 宜興西晋周处墓出土  
10~12. 奈良県新山古墳出土 13~18. 京都個人蔵 19・20. 出光 美術館蔵

【釈文】

台（治）天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名  
无□（利カ）弓、八月中、用大鉄釜并四尺廷刀、  
八十練、□（九カ）十振、三寸上好□（利カ）刀、  
服此刀者、長寿、子孫洋々、得□恩也、不失其所統、  
作刀者名伊太□（和カ）、書者張安也

【読み下し文】

天の下治らしめしし、獲□□□鹵大王の世、典曹に奉事せ  
し人、名は无利弓、八月中、大鉄釜を用い、四尺の延刀を并  
わす。八十たび練り、九十たび振つ。三寸上好の利刀なり。  
此の刀を服する者は、長寿にして子孫洋々、□恩を得る也。  
其の統ぶる所を失わず。刀を作る者、名は伊太和、書する者  
は張安也。（釈文・読み下し文ともに東野治之氏による。）



12 銀象嵌銘文大刀拡大  
【原品国宝】

銀象嵌銘文大刀 長さ 91cm  
【原品国宝】

大阪府立近づ飛鳥博物館、2015『ワタケル大王の時代へヤマ王権の成熟と革新へ』  
平成27年度秋季特別展(国宝)

【釈文】

(表)

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比塊其兒多加利足尼其兒名弓已加利  
獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比

(裏)

其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事來至今獲加多支齒大  
王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百鍊利刀記吾奉事根原也

【読み下し文】

辛亥年七月中、記す。ヲワケの臣。上祖、名をオホヒコ。其の児、(名は)  
タカリのスクネ。其の児、名はテヨカリワケ。其の児、名はタカヒ(ハ)  
シワケ。其の児、名はタサキワケ。其の児、名はハテビ。  
其の児、名はカサヒ(ハ)ヨ。其の児、名はヲワケの臣。世々、杖刀人  
の首と為り、奉事し來り今に至る。ワカタケ(キ)ル(口)の大王の寺、  
シキの宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百鍊の利刀を作らしめ、吾が  
奉事の根原を記す也。

(釈文・読み下し文とともに岸俊男・田中稔・狩野久氏による)



金錯銘鉄剣【原品国宝 国（文化庁）所管】長さ 73.5cm

# 稻荷山古墳

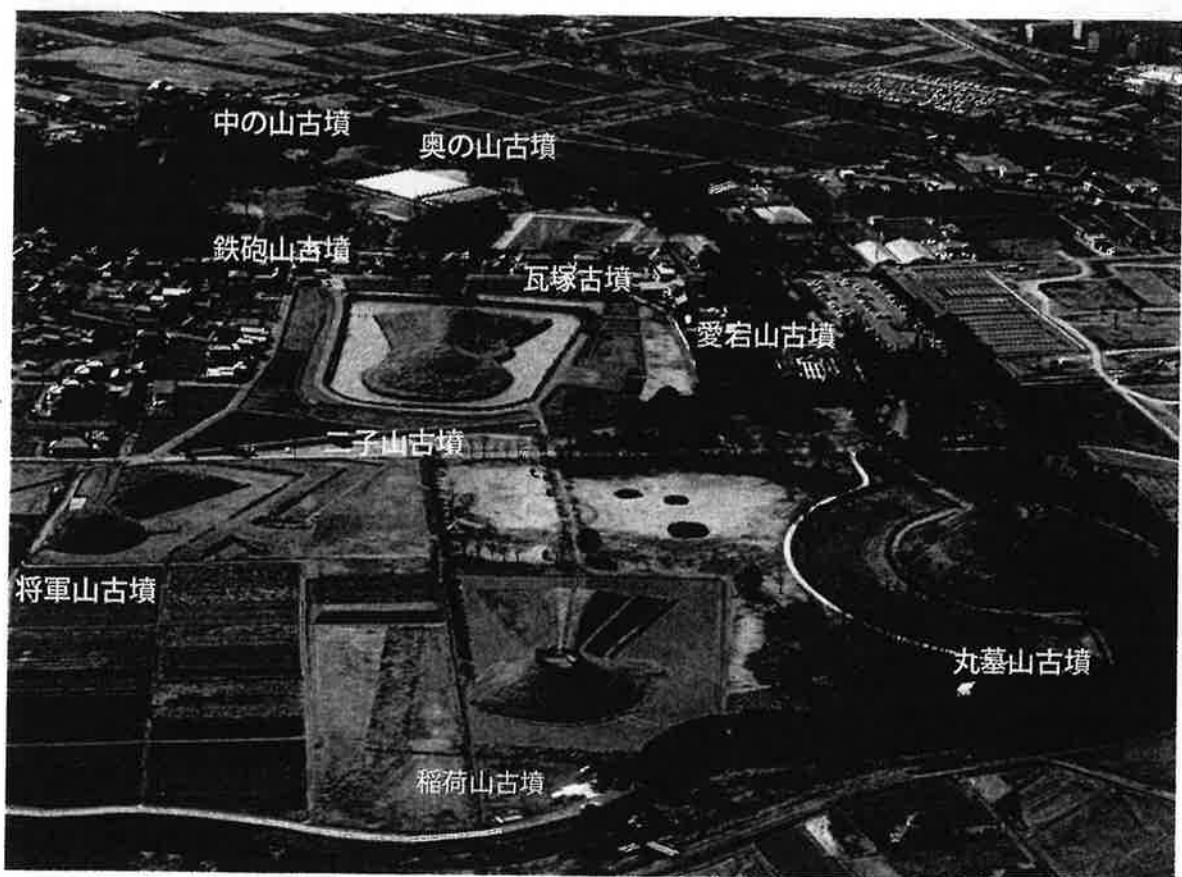
古墳時代中期後葉

埼玉県行田市

埼玉県行田市埼玉の埼玉台地上にある埼玉古墳群は武藏国内最大規模の古墳群で、武藏国造歴代の墓域との考えもあります。その中でも最も古いとされ、最北に位置する稻荷山古墳は、墳長一二〇m、後円部高一・七mを測る前方後円墳です。墳丘は二段築成で長方形の周濠を二重にめぐらせ、左くびれ部に造出しと同側中堤に張出しと陸橋をもちます。後円部墳頂より二基の埋葬施設が確認されたが、そのうち墳長部西寄りの礫槻から多数の副葬品が出土しました。二基の埋葬施設についてはいずれも墳丘中央部に位置しておらず、また墳頂平坦面が広いことから、同古墳は築造当初から複数埋葬を想定しており、中央部に墓主の埋葬施設が存在する可能性が考えられます。

出土した副葬品には画文帶神獸鏡、帶金具、剣、鈴杏葉などの馬具がありますが、中でも鉄剣からは表に五七文字・裏に五八文字の金象嵌の銘文がみつかり、注目を集めました。くびれ部では有蓋高壺などTK一二三・四七型式、五世紀後葉の時期を示す須恵器が出土しており、またこれらの須恵器は古墳の最初の被葬者の葬送儀礼に使用されたものとも考えられます。このことから礫槻の被葬者の埋葬時期は少し遅れた五世紀末ないし六世紀初頭となることが想定されます。また張出しからは多様な形象埴輪もみつかっています。

鉄剣の銘文の内容は「乎獲居（ヲワケ）」一族の系譜と杖刀人首という役職に就いたこと、ワカタケル大王がシキの宮に居るときにヲワケが政治を補佐したことなどがあり、辛亥年にこの銘文を記したことなどが示されています。辛亥年については、四七一年と見る説が有力です。また、ヲワケという人物については①畿内豪族と見る説、②北武藏の豪族と見る説などがあり、また同古墳の被葬者についても①ヲワケ本人と見る説、②ヲワケから鉄剣を与えられた北武藏の豪族と見る説などさまざまです。



北から望む埼玉古墳群

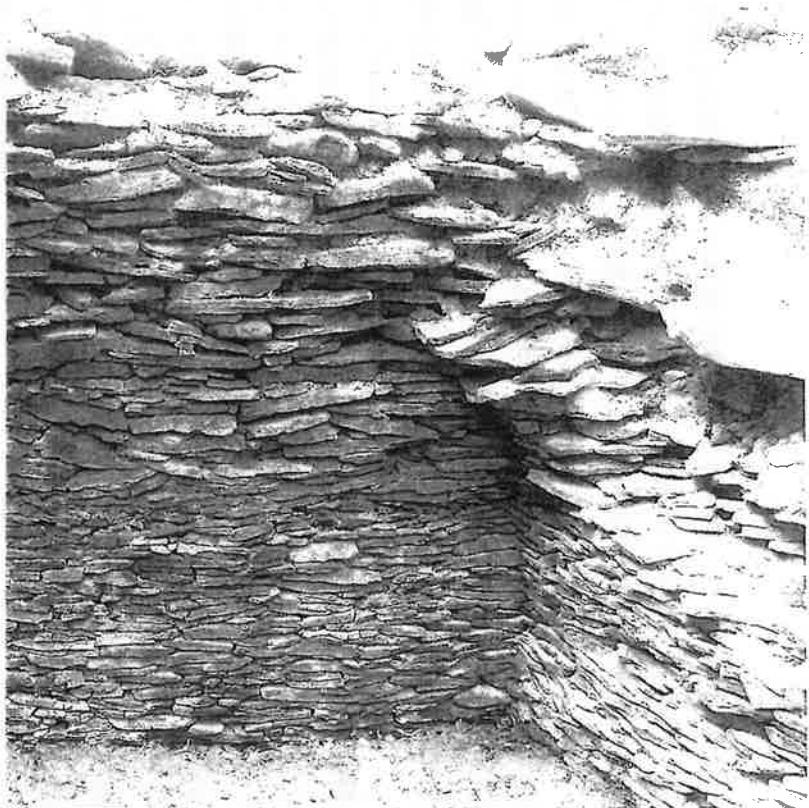
大阪府立近つ飛鳥博物館、2015『ワカタケル大王の時代～ヤマト王権の成熟と革新～』  
平成27年度秋季特別展(回録)

## 老司古墳

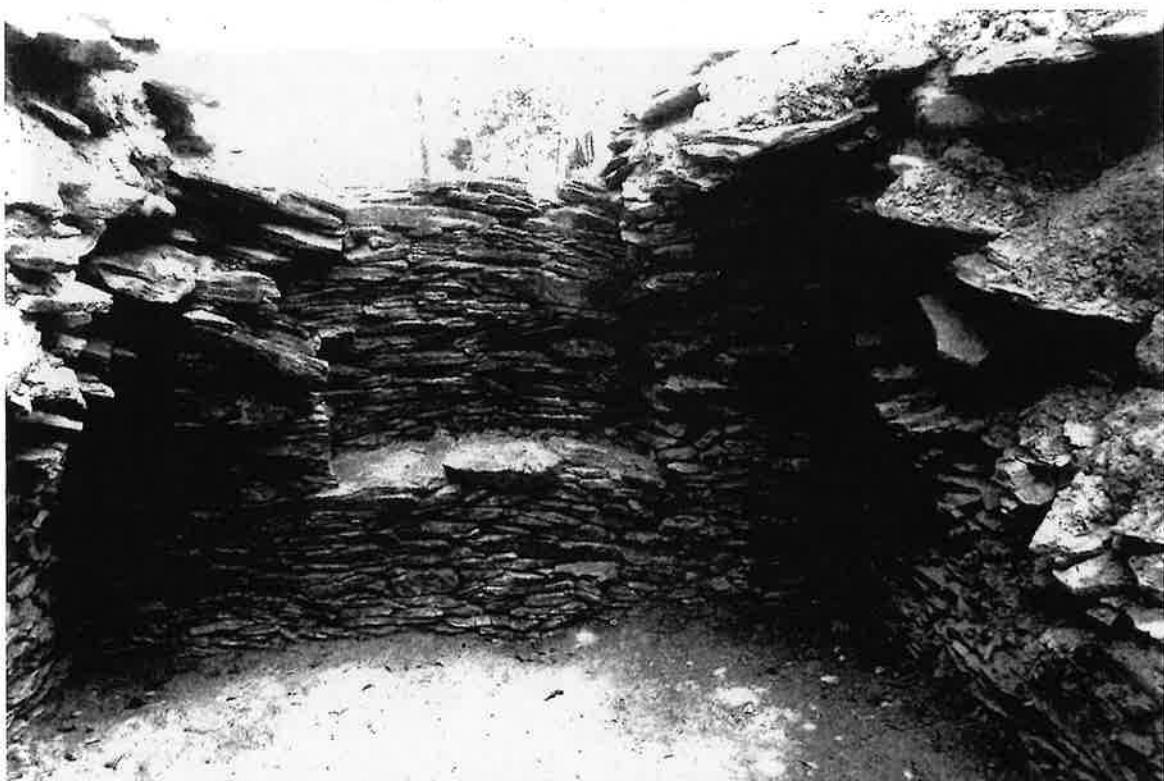


75~  
76m

福岡県福岡市  
四世紀後葉



石室奥壁 壁面は板状石材を使って積み上げ、持ち送りになっています



石室横口部

横口部は段状になっています

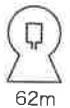
大阪府立近つ張鳥博物館, 2007『横穴式石室誕生 萩原國の成立』

老司古墳には四つの埋葬施設がありますが、このうち後円部中央にある三号石室が中心となる埋葬施設といえます。三号石室は竪穴系横口式石室で、玄室は長さ三・一メートル、幅二・一メートルの長方形をしています。石室の南側に横口部が設けられ、段状となっています。閉塞は板状の石材を用いていました。壁面は板状の石材を用いて持ち送りを伴いながら構築しており、竪穴式石室と共通の特徴を示しています。出土品は三角縁神獸鏡のほか多数の鏡、素環頭大刀などの刀剣類、甲冑、馬具、農工具など豊富な副葬品が確認されています。三号石室では三体以上の埋葬が推測されます。

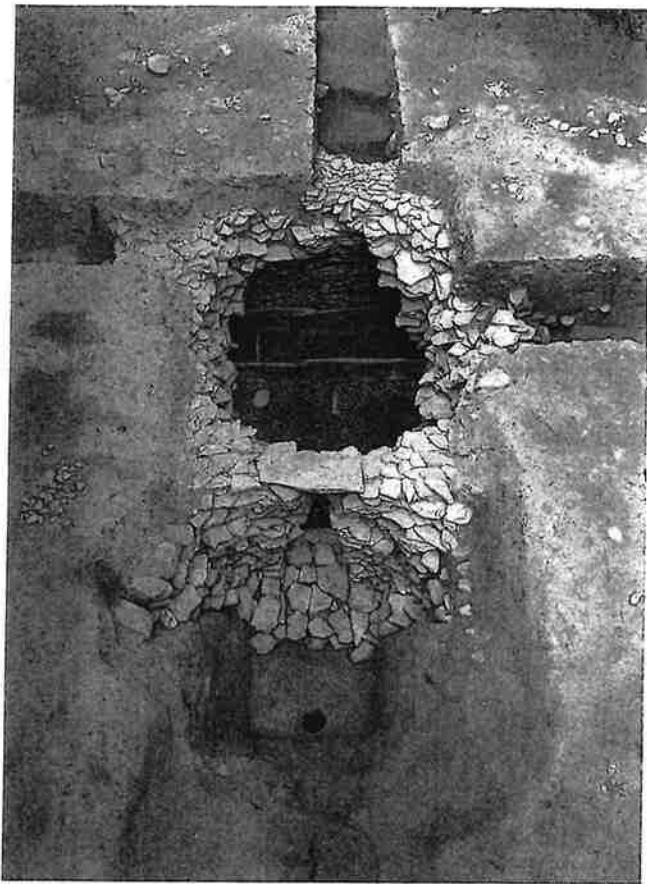
老司古墳は、谷口古墳とともに横穴系の埋葬施設を採用した最も古い古墳といえます。老司古墳は玄界灘に面しており、海を隔てた朝鮮半島との交流が盛んな地に位置します。こうした地理的な環境によって半島の横穴式石室の存在を知り、従来の竪穴式石室に入口を設けた竪穴系横口式石室が生まれたのでしょう。

# 鋤崎古墳

すきざき



福岡県福岡市  
四世紀後葉～五世紀前葉



石室と墓道

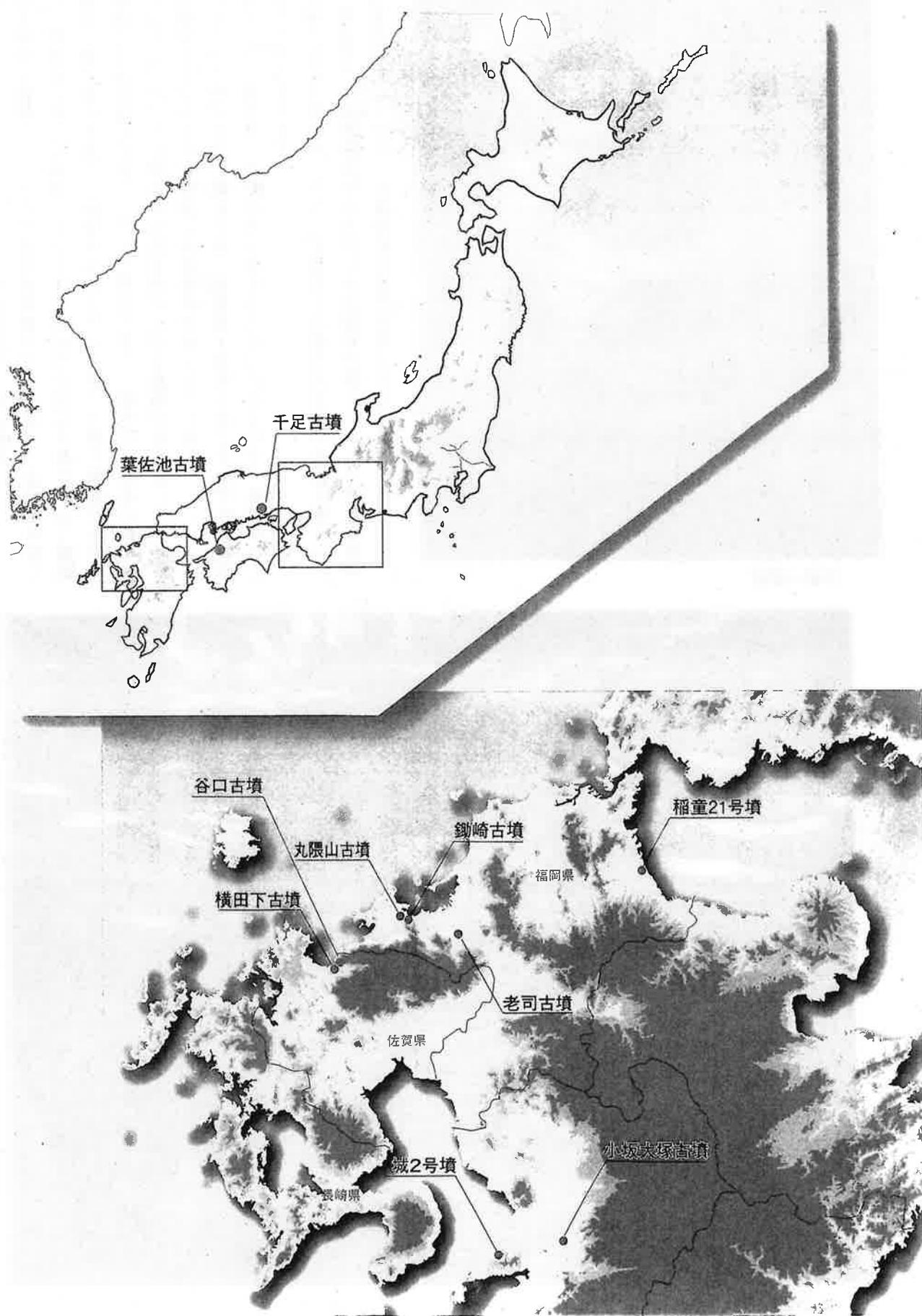
博多湾を望む丘陵端につくられた前方後円墳です。石室は、後円部中央につくられ、前方部に向いて開口しています。玄武岩の板石を積み重ねて構築した石室は、長方形の玄室と、前壁中央にとりつく狭くて短い羨道からなります。羨道は玄室床面から約〇・五メートルの高さにあり、縦長の二等辺三角形をした狭い入り口です。その前面には急角度に上がる墓道がありました。玄室と羨道の壁面および天井石の全面に赤色顔料が塗られています。

玄室には三つの棺があり、箱形石棺、埴質棺<sup>はぜしふ</sup>、箱形木棺とそれぞれ素材が異なる棺でした。埴質棺、箱形木棺は後から入れられたもので、追葬がおこなわれたことがわかります。

鋤崎古墳の石室は羨道がとりつく定型化した横穴式石室の初現と考えられます。が、墳頂部での埴輪祭祀や石室内に赤色顔料が塗られるなど前期以来の伝統的な要素が残つており、古墳祭祀の変化を考える上で重要です。



石室玄門部（玄室より）



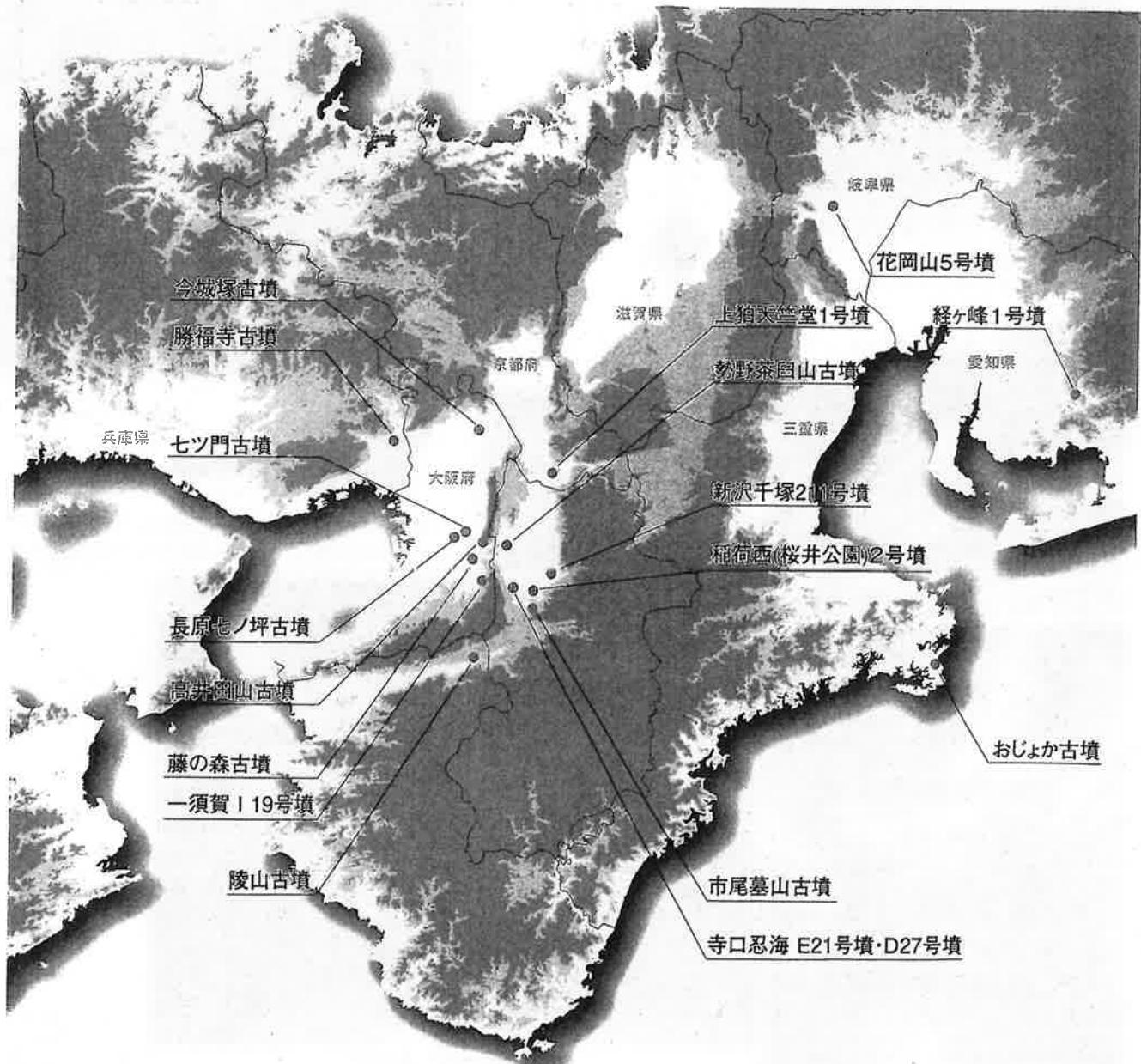
大阪府立近つ難鳥博物館、2007 横穴式石室誕生 黄泉國の成立

遺体を埋葬する玄室と、そこへつながる通路である羨道を備えた墓室を横穴式石室といいます。こうした墓制は中国の地下に営まれた墓室へ至る墓道を持つた墳墓を起源とし、活発な国際交流が展開され始めた時代、高句麗ないし百濟を経由して、我が國へもたらされたとみられます。

四世紀の終わり頃、日本列島にはじめて出現した横穴系墓制の特徴と、その後さまざまな石室が生み出される過程を北部九州を中心とした代表的な古墳から知り、さらに列島各地に九州系石室の一時的な拡散が認められる状況についてもみて、いきたいと思います。

九州にやや遅れて現れた畿内の横穴式石室を紹介します。当初は中小規模墳の埋葬施設として採用されました。やがて前方後円墳にも採用されるようになりました。石室構造そのものや石室内への土器副葬が伴う点などは、朝鮮半島からの直接的な影響が認められ、九州系石室との違いを認識できることでしょう。

大量の土器副葬、追葬の普遍化、埴輪配置の変化などをキーワードに、横穴式石室における埋葬行為とはいかなるものであったのか、横穴式石室の導入が当時の人びとの他界観念にどのように影響を与えたのかについて迫つてみたいと思います。



# 石室 (横穴式・豎穴式)

構成／土生田純之

5世紀中葉前後、西日本の兵庫県加古川市～姫路市や岡山市ではそれまでのものと比較して、平面は長さが短く幅広で上部まで直立ぎみの豎穴式石室が構築されたが、洛東江中流域からの渡来人墓と目される。このほか、後の畿内にはやや遅れて百濟系の横穴式石室が構築されており、両国の密接な関係を背景とした彼地からの渡来人墓であろう。7世紀になると須曾蝦夷穴古墳のように、高句麗系の横穴式石室が北陸地方で構築される。これは新羅に対抗するために、大和王権に急接近した高句麗の外交政策とも密接な関連を有する事例として注目される。



宮山古墳 第2主体（上）・垂飾付耳飾（右）  
(姫路市教育委員会所蔵)



高井田山古墳 横穴式石室全景(上)・出土熨斗(下)  
(柏原市教育委員会『高井田山古墳 [本文編]』から転載)



須曾蝦夷穴古墳 雄穴石室  
(七尾市教育委員会提供)

上右：古墳全景  
上左：玄室天井  
下右：玄室東壁  
下左：玄室奥壁